

思い出す事など

夏目漱石

青空文庫

ようやくの事でまた病院まで帰って来た。思い出すとここで暑い朝夕あさゆうを送ったのももう三カ月の昔になる。その頃は二階ころうの廂ひさしから六尺に余るほどの長い葭簀よしずを日除ひよけに差し出して、熱ほてりの強い縁側えんがわを幾分いくぶんか暗くしてあつた。その縁側えんがわに是公ぜこうから貰かえてった楓かえでの盆栽ぼんさいと、時々人の見舞に持つて来てくれる草花などを置いて、退屈しゆも凌まぎぎ暑あつさも紛まぎらしていた。向むこうに見える高い宿屋の物干ものほしに真裸まっぱだかの男が二人出て、日盛ひさかりを事ともせず、欄干らんかんの上を危あぶなく渡つたり、または細長い横木の上にわざと仰あおむけ向むこうに寝たりして、ふざけまわる様子を見て自分もいつか一度はもう一遍たぐまあんな逞たくましい体格になつて見たいと羨うらやんだ事もあつた。今はすべてが過去に化してしまつた。再び眼の前に現れぬと云う不慥ふたしかな点において、夢と同じくはかない過去である。

病院を出る時の余は医師の勧めに従つて転地する覚悟はあつた。けれども、転地先で再度やまの病かかに罹かかつて、寝たまま東京へ戻つて来ようとは思わなかつた。東京へ戻つてもすぐ自分の家の門は潜くぐらずに釣台つりだいに乗つたまま、また当時の病院に落ちつく運命にならうとは

なおさら思いがけなかった。

帰る日は立つ修善寺も雨、着く東京も雨であった。扶けられて汽車を下りるときわざわざ出迎えてくれた人の顔は半分も眼に入らなかつた。目礼をする事のできたのはその中の二三に過ぎなかつた。思うほどの会釈もならないうちに余は早く釣台の上に横えられていた。黄昏の雨を防ぐために釣台には桐油を掛けた。余は坑の底に寝かされたような心持で、時々暗い中で眼を開いた。鼻には桐油の臭がした。耳には桐油を撲つ雨の音と、釣台に付添うて来るらしい人の声が微かながらとぎれとぎれに聞えた。けれども眼には何物も映らなかつた。汽車の中で森成さんが枕元の信玄袋の口に挿し込んでくれた大きな野菊の枝は、降りる混雑の際に折れてしまつたらう。

釣台に野菊も見えぬ桐油哉

これはその時の光景を後から十七字にちぢめたものである。余はこの釣台に乗つたまま病院の二階へ昇き上げられて、三カ月前に親しんだ白いベッドの上に、安らかに瘖せた手足を延べた。雨の音の多い静かな夜であつた。余の病室のある棟には患者が三四名しかないのので、人声も自然絶え勝に、秋は修善寺よりもかえってひっそりしていた。

この静かな宵を心地よく白い毛布の中に二時間ほど送つた時、余は看護婦から二通の電

報を受取つた。一通を開けて見ると「無事御帰京を祝す」と書いてあつた。そうしてその差出人は満洲にいる中村是公なかむらげこうであつた。他の一通を開けて見ると、やはり無事御帰京を祝すと云う文句で、前のと一字の相違もなかつた。余は平凡ながらこの暗合あんごうを面白く眺めつつ、誰が打つてくれたのだらうと考えて差出人の名前を見た。ところがステトとあるばかりでいっこうに要領を得なかつた。ただかけた局が名古屋とあるのでようやく判断がついた。ステトと云うのは、鈴木禎次すずきていじと鈴木時子すずきときこの頭文字かしらもじを組み合わせたもので、妻さいの妹いもとその夫おつとの事であつた。余は二ツの電報を折り重ねて、明朝あすまた来るべき妻さいの顔を見たら、まずこの話をしようかと思ひ定めた。

病室は畳も青かつた。襖ふすまも張り易かであつた。壁も新あらたに塗ぬつたばかりであつた。万居心よろずよく整つていた。杉本副院長が再度修善寺へ診察に来た時、畳たたみ替かをして待つていますと妻に云い置かれた言葉をすぐに思ひ出したほど奇麗きれいである。その約束の日から指を折つて勘定かんじようして見ると、すでに十六七日目になる。青い畳もだいぶ久しく人を待つたらしい。

思ひけりすでに幾夜いくよの蟋きりぎりす 蟀きりぎりす

その夜から余は当分またこの病院を第二の家とする事にした。

二

病院に帰り着いた十一日の晩、回診の後藤さんにこの頃院長の御病気はどうですかと聞いたら、ええひとしきりはだいぶ好い方でしたが、近来また少し寒くなったものですから……と云う答だったので、余はどうぞ御逢いの節は宜しくと挨拶した。その晩はそれぎり何の気もつかずに寝てしまった。すると明日の朝妻が来て枕元に坐るや否や、実はあなたに隠しておりましたが長与さんは先月五日に亡くなられました。葬式には東さんに代理を頼みました。悪くなつたのは八月末ちようどあなたの危篤だった時分ですと云う。余はこの時始めて附添のものが、院長の訃をことさらに秘して、余に告げなかつた事と、またその告げなかつた意味とを悟つた。そうして生き残る自分やら、死んだ院長やらをとかくに比較して、しばらくは茫然としたまま黙つていた。

院長は今年の春から具合が悪かつたので、この前入院した時にも六週間の間ついぞ顔を見合せた事がなかつた。余の病気の由を聞いて、それは残念だ、自分が健康でさえあれば治療に尽力して上げるのにと云う言伝があつた。その後も副院長を通じて、よろしくと

云う言伝ことづてが時々あつた。

修善寺しゆぜんじで病気がぶり返して、社から見舞のため森成もりなりさんを特別に頼んでくれた時、着いた森成さんが、病院の都合上とても長くはと云っているその晩に、院長はわざわざ直接森成さんに電報を打って、できるだけ余の便宜へんいを計らはかつてくれた。その文句は寝ている余の目には無論触れなかつた。けれども枕元まくらもとにいる雪鳥君せつちようくんから聞いたその文句の音おんだけは、いまだに好意の記憶として余の耳に残っている。それは自分その地に留とどまり、充分看護に心を尽くすべしとか云う、森成さんに取おつてはずいぶん厳おごかに聞える命令的なものであつた。

院長の容態ようたいが悪くなつたのは余の危篤おちいに陥つたのとほぼ同時だそうである。余が鮮血を多量に吐はいて傍人ぼうじんからとうてい回復の見込がないように思われた二三日あど後、森成さんが病院の用事だからと云つて、ちよつと東京へ歸つたのは、生前に一度院長に会うため、それから十日ほど経たつて、また病院の用事ができて二度東京へ戻つたのは院長の葬式に列するためであつたそうである。

当初から余に好意を表して、間接に治療上の心配をしてくれた院長はかくのごとくしだいに死に近づきつつある間に、余は不思議にも命の幅はばの縮ちぢまってほとんど絹糸のごとく細

くなつた上を、ようやく無難に通り返した。院長の死が一基の墓標で永く確められたとき、辛抱強く骨の上に絡みついていてくれた余の命の根は、辛うじて冷たい骨の周囲に、血の通う新しい細胞を営み初めた。院長の墓の前に供えられる花が、幾度か枯れ、幾度か代つて、萩、桔梗、女郎花から白菊と黄菊に秋を進んで来た一カ月余の後、余はまたその一カ月余の間に盛返し得るほどの血潮を皮下に盛得て、再び院長の建てたこの胃腸病院に帰つて来た。そうしてその間いまだかつて院長の死んだと云う事を知らなかつた。帰る明る朝妻が来て実はこれこれと話をするまで、院長は余の病気の経過を東京にいて承知しているものと信じていた。そうして回復の上病院を出たら礼にでも行こうと思つていた。もし病院で会えたら篤く謝意でも述べようと思つていた。

逝く人に留まる人に来る雁

考えると余が無事に東京まで帰れたのは天幸である。こうなるのが当り前のよう思ふのは、いまだに生きているからの悪度胸に過ぎない。生き延びた自分だけを頭に置かず、命の綱を踏み外した人の有様も思い浮べて、幸福な自分と照らし合せて見ないと、わがありがたさも分らない、人の気の毒さも分らない。

ただ一羽来る夜ありけり月の雁

三

ジエームス教授の訃に接したのは長与院長の死を耳にした明日の朝である。新着の外国雑誌を手にして、五六頁繰って行くうちに、ふと教授の名前が眼にとまったので、また新しい著書でもお付けにしたのか知らんと思ひながら読んで見ると、意外にもそれが永眠の報道であった。その雑誌は九月初めのもので、項中には去る日曜日に六十九歳をもつて逝かるとあるから、指を折つて勘定して見ると、ちやうど院長の容体がしだいに悪い方へ傾いて、傍のものが昼夜眉を顰めてゐる頃である。また余が多量の血を一度に失つて、死生の境に彷徨してゐた頃である。思うに教授の呼吸を引き取つたのは、おそらく余の命が、瘡せこけた手頸に、有るとも無いとも片付かない脈を打たして、看護の人をはらはらさせていた日であろう。

教授の最後の著書「多元的宇宙」を読み出したのは今年の夏の事である。修善寺へ立つとき、向へ持つて行つて読み残した分を片付けようと思つて、それを五六巻の書物とともに鞆の中に入れた。ところが着いた明日から心持が悪くて、出歩く事もならない始末

になった。けれども宿の二階に寝転びながら、一日二日は少しずつでも前の続きを読む事ができた。無論病勢の募るに伴って読書は全く廃さなければならなくなったので、教授の死ぬ日まで教授の書を再び手に取る機会はなかった。

病びようしやう

牀しやうにありながら、三たび教授の多元的宇宙を取り上げたのは、教授が死んでから幾日目になるだろう。今から顧みると当時の余は恐ろしく衰弱していた。仰向あむむけに寝て、

両方の肘ひじを蒲団ふとんに支えて、あのくらの本を持ち応えていのにずいぶんと骨が折れた。

五分と経たないうちに、貧血の結果手が麻痺しびれるので、持ち直して見たり、甲を撫なでて見たりした。けれども頭は比較的疲れていなかったと見えて、書いてある事は苦もなく会得えとくができた。頭だけはもう使えるなど云う自信の出たのは大吐血以後この時が始めてであった。嬉しいので、妻さいを呼んで、身体からだの割に頭は丈夫なものだねと云って訳を話すと、妻がいつたいあなたの頭は丈夫過ぎます。あの危篤あぶなかった二三日の間などは取り扱い悪にくくて大変弱らせられましたと答えた。

多元的宇宙は約半分ほど残っていたのを、三日ばかりで面白く読み了おわった。ことに文学者たる自分の立場から見て、教授が何事によらず具体的事実を土台として、類アナロジー推プーで哲学の領分に切り込んで行く所を面白く読み了おわった。余はあながちに弁証ダイアレクチック法キョウを嫌きらう

ものではない。また妄りにみだ理知主義インテレクチュアリズムを厭いといもしない。ただ自分の平生文学上に抱いてゐる意見と、教授の哲学について主張するところの考とが、親しい気脈を通じて彼此相倚あひよるような心持がしたのを愉快に思つたのである。ことに教授が仏蘭西フランスの学者ベルグソンの説を紹介する辺りあたを、坂に車を転がすような勢いきおいで馳かけ抜けたのは、まだ血液の充分に通いもせぬ余の頭に取つて、どのくらい嬉うれしかったか分らない。余が教授の文章にいたく推服したのはこの時である。

今でも覚えてゐる。一間ひとまおいて隣となにいる東君ひがしくんをわざわざ枕元へ呼んで、ジエームスは実に能文家のうぶんかだと教えるように云つて聞かした。その時東君は別にこれという明瞭めいりょうな答をしなかつたので、余は、君、西洋人の書物を読んで、この人の流暢りゅうちやうだとか、あの人の細緻さいちだとか、すべて特色のあるところがその書きぶりかきぶりで、読みながら解るかいと失敬な事を問ただい糺ただした。

教授の兄弟にあたるヘンリーは、有名な小説家で、非常に難澁なんじゆうな文章を書く男である。ヘンリーは哲学のような小説を書き、ウィリアムは小説のような哲学を書く、と世間で云われているくらいヘンリーは読みづらく、またそのくらい教授は読みやすくて明快なのである。——病中の日記を検しらべて見ると九月二十三日の部に、「午前ジエームスを読み

了る。好い本を読んだと思う」と覚束ない文字で認めてある。名前や標題に欺されて下らない本を読んだ時ほど残念な事はない。この日記は正にこの裏を云つたものである。余の病気について治療上いろいろ好意を表してくれた長与病院長は、余の知らない間にいつか死んでいた。余の病中に、空漠なる余の頭に陸離の光彩を抛げ込んでくれたジェームス教授も余の知らない間にいつか死んでいた。二人に謝すべき余はただ一人生き残っている。

菊の雨われに閑ある病哉

菊の色縁に未し此晨

(ジェームス教授の哲学思想が、文学の方面より見て、どう面白いかここに詳説する余地がないのは余の遺憾とするところである。また教授の深く推賞したベルグソンの著書のうち第一巻は昨今ようやく英訳になってゾンネンシャインから出版された。その標題は Time and Free Will (時と自由意思) と名づけてある。著者の立場は無論故教授と同じく反理知派である。)

病やまいの重かつた時は、固もとよりその日その日に生きていた。そうしてその日その日に變つて行つた。自分にもわが心の水のように流れ去る様がよく分つた。自白すれば雲と同じくかつ去りかつ来るわが脳裡のうりの現象は、極めて平凡なものであつた。それも自覺していた。生し涯ようがいに一度か二度の大患に相應するほどの深さも厚さも無い經驗を、恥はじとも思わず無邪氣に重ねつつ移つて行くうちに、それでも他日の参考にごとごとの心を日ごとくに書いておく事ができたならと思ひ出した。その時の余は無論手が利きかなかつた。しかも日は容易に暮れ容易に明けた。そうして余の頭を掠かすめて去る心の波紋はもんは、随したがつて起おこるかと思えば随したがつて消えてしまつた。余は薄ぼけて微かすかに遠とほきに行くわが記憶の影を眺めては、寝ながらそれを呼び返したいような心持がした。ミュンステルベルグと云う学者の家に賊が入つた引ひきあ合あひで、他日彼が法ほうてい庭ていへ呼び出されたとき、彼の陳述はほとんど事實に相違する事ばかりであつたと云う話がある。正確を旨むねとする几帳きちょうめん面な学者の記憶でも、記憶はこれほどに不慥ふたしかなものである。「思ひ出す事など」の中に思ひ出す事が、日を経ふれば経るに従つて色彩を失うのはもちろんである。

わが手の利きかぬ先にわが失えるものはすでに多い。わが手筆を持つ力の得てより逸いっす

るものまた少からずと云つても嘘にはならない。わが病気の経過と、病気の経過に伴れて起る内面の生活とを、不秩序ながら断片的にも叙しておきたいと思ひ立つたのはこれがためである。友人のうちには、もうそれほど好くなつたかと喜んでくれたものもある。あるいはまたあんな軽挙かるはずみをしてやり損そこなわなければいごと心配してくれたものもある。その中で一番苦い顔をしたのは池辺三山君であつた。余が原稿を書いたと聞くや否や、たちまち余計な事だと叱りつけた。しかもその声はもつとも無愛想ぶあいそうな声であつた。医者いしやの許可を得たのだから、普通の人の退屈たいくつ凌しのぎぐらいなど見たらよかろうと余は弁解した。医者いしやの許可もさる事だが、友人の許可を得なければいかんと云うのが三山君の揆あでであつた。それから二三日して三山君が宮本博士に会つてこの話をする、博士は、なるほど退屈たいくつをすると胃いに酸さんが湧わく恐れがあるからかえつて悪いだろうと調停してくれただ、余はようやく助かつた。

その時余は三山君に、

遺。却。新。詩。無。処。尋。 ※。

斜。陽。滿。徑。照。僧。遠。 黄。葉。一。村。藏。寺。深。

懸。偈。壁。間。焚。仏。意。 見。雲。天。上。抱。琴。心。

人間至樂江湖老。犬吠鷄鳴共好音。

と云う詩を遺つた。巧拙は論外として、病院にいる余が窓から寺を望む訳もなし、また室内に琴を置く必要もないから、この詩は全くの実況に反しているには違ないが、ただ當時の余の心持を詠じたものとしてはすこぶる恰好である。宮本博士が退屈をすると酸がたまると云つたごとく、忙殺されて酸が出過ぎる事も、余は親しく経験している。詮ずるところ、人間は閑適の境界に立たなくては不幸だと思うので、その閑適をしばらくなりとも貪り得る今の身の嬉しさが、この五十六字に形を変じたのである。

もつとも趣から云えばまことに古い趣である。何の奇もなく、何の新もないと云つてもよい。実際ゴルフでも、アンドレーフでも、イブセンでもシヨウでもない。その代りこの趣は彼ら作家のいまだかつて知らざる興味に属している。また彼らのけつして与からざる境地に存している。現今の吾らが苦しい実生活に取り巻かれるごとく、現今の吾等が苦しい文学に取りつかれるのも、やむをえざる悲しき事実ではあるが、いわゆる「現代的气氛」に煽られて、三百六十五日の間、傍目もふらず、しかく人世を覗いたら、人世は定めし窮屈でかつ殺風景なものだろう。たまにはこんな古風の趣がかえって一段の新意を吾らの内面生活上に放射するかも知れない。余は病に因つてこの陳腐な幸福と爛熟な寛

裕つろぎを得て、初めて洋行から帰つて平凡な米の飯に向つた時のような心持がした。

「思い出す事など」は忘れるから思い出すのである。ようやく生き残つて東京に帰つた余は、病に因つて纒わづかに享うけえたこの長閑のどかな心持を早くも失わんとしつゝある。まだ床とこを離れるほどに足腰が利きかないうちに、三山君に遺つた詩が、すでにこの太平の趣をうたうべき最後の作ではなからうかと、自分ながら掛念けねんしているくらいである。「思い出す事など」は平凡で低調な個人の病中における述じゆつかい懐けねんと叙事に過ぎないが、その中うちにはこの陳腐ちんぷながら扨ふつてい底おもむきな趣が、珍らしくだいぶ這入はいつて来るつもりであるから、余は早く思い出して、早く書いて、そうして今の新しい人々と今の苦しい人々と共に、この古い香かおりを懐なつかしみたいと思う。

五

修善寺しゆぜんじにいる間は仰向あむむけに寝たままよく俳句を作つては、それを日記の中に記つけ込こんだ。時々は面倒ひょうまんな平ひょう仄そくを合あわして漢詩さえ作つて見た。そうしてその漢詩も一つ残こらず未定稿みていこうとして日記の中に書きつけた。

余は年来俳句に疎うとくなりまさった者である。漢詩に至うつては、ほとんど当初からの門外漢と云つてもいい。詩にせよ句にせよ、病中にでき上ったものが、病中の本人にはどれほど得意であつても、それが専門家の眼に整つて（ことに現代的に整つて）映るとは無論思われない。

けれども余が病中に作り得た俳句と漢詩の価値は、余自身から云うと、全くその出来不出来に關係しないのである。平生へいぜいはいかに心持の好くない時でも、いやしくも塵事じんじに堪え得るだけの健康をもつていると自信する以上、またもつていると人から認められる以上、われは常住じやうじゆう日夜共に生存競争裏せいぞんきやうそうりに立つ悪戦の人である。仏語ぶつごで形容すれば絶えず火宅かたくの苦を受けて、夢の中でさえいらしている。時には人から勧められる事もあり、たまには自ら進む事もあつて、ふと十七字を並べて見たりまたは起承転結きしやうてんけつの四句ぐらい組み合せないとも限らないけれどもいつもどこかに間隙すきがあるような心持がして、隈くまも残さず心を引き包ひくるんで、詩と句の中に放り込む事ができない。それは歡樂を嫉ねたむ実生活の鬼の影が風流に纏まつわるためかも知れず、または句に熱し詩に狂するのあまり、かえつて句と詩に翻弄ほんろうされて、いらいらすまじき風流にいらいらする結果かも知れないが、それではいくら佳句かくと好詩こうしができたにしても、贏かち得る当人の愉快はただ二三同好どうこうの評判だけで、

その評判を差し引くと、後に残るものは多量の不安と苦痛に過ぎない事に帰着してしまふ。

ところが病氣をするとだいぶ趣が違つて来る。病氣の時には自分が一步現実の世を離れた氣になる。他も自分を一步社会から遠ざかつたように大目に見てくれる。こちらには一人前ちんまへ働かなくてもすむという安心ができ、向うにも一人前として取り扱うのが氣の毒だ

という遠慮がある。そうして健康の時にはとても望めない長閑のどかな春がその間から湧いて出る。この安らかな心がすなわちわが句、わが詩である。したがって、出来栄できばえの如何はまおず措いて、できたものを太平の記念と見る当人にはそれがどのくらい貴いとうとか分らない。病

中に得た句と詩は、退屈を紛まぎらすため、閑かんに強しいられた仕事ではない。実生活の圧迫を逃れたわが心が、本来の自由に跳ね返つて、むつちりとした余裕を得た時、油然ゆうぜんと漲みなぎり浮うかんだ天来てんらいの彩紋さいもんである。吾ともなく興の起るのがすでに嬉しい、その興を捉とらえて横かに咬かみ豎たてに砕くだいて、これを句なり詩なりに仕上げる順序過程がまた嬉しい。ようやく成つた暁には、形のない趣を判然はつきりと眼の前に創造したような心持がしてさらに嬉しい。はたしてわが趣とわが形に眞の価値があるかないかは顧みるいとま違ちがひえない。

病中は知ると知らざるとを通じて四方の同情者から懇切な見舞みまいを受けた。衰弱の今の身ではその一々に一々の好意に背かないほどに詳しい礼状を出して、自分がつい死にもせず

今日こんにちに至つた経過を報ずる訳にも行かない。「思い出す事など」を牀しょうじょう上じやうに書き始めたのは、これがためである。——各々めいめいに向けて云い送るべきはずのところを、略して文ぶん芸欄げんらんの一隅にのみ載せて、余のごときものために時と心を使われたありがたい人々にわが近況を知らせるためである。

したがって「思い出す事など」の中に詩や俳句を挟はさむのは、単に詩人俳人としての余の立場を見て貰うつもりではない。実を云うとその善悪などはむしろどうでも好いいとまで思つている。ただ当時の余はかくのごとき情調に支配されて生きていたという消息が、一いち瞥べつの迅ときうちちに、読者の胸に伝われば満足なのである。

秋の江えに打ち込む杭くいの響なかな

これは生き返つてから約十日ばかりしてふとできた句である。澄み渡る秋の空、広き江、遠くよりする杭の響、この三つの事相じさうに相応したような情調が当時絶えずわが微かすかなる頭の中を徂徠そらいした事はいまだに覚えている。

秋の空あきぎ浅黄あさぎに澄あり杉わのに斧の

これも同じ心の耽ふけりを他ほかの言葉で云い現したものである。

別わかるるや夢ゆめ一筋ひとすじの天の川

何という意味かその時も知らず、今でも分らないが、あるいは仄に東洋城と別れる折の連想が夢のような頭の中に這回つて、恍惚とでき上ったものではないかと思う。

当時の余は西洋の語にほとんど見当らぬ風流と云う趣をのみ愛していた。その風流のうちでもここに挙げた句に現れるような一種の趣だけをとくに愛していた。

秋風や唐紅の咽喉仏

という句はむしろ実況であるが、何だか殺気があつて含蓄が足りなくて、口に浮かんだ時からすでに変な心持がした。

風流人未死。病裡領清閑。

日々山中事。朝々見碧山。

詩に圈点のないのは障子に紙が貼つてないような淋しい感じがするので、自分で丸を付けた。余のごとき平仄もよく弁えず、韻脚ももう覚えにしか覚えていないものが何を苦しんで、支那人にだけしか利目のない工夫をあえてしたかと云うと、実は自分にも分らない。けれども（平仄韻字はさておいて）、詩の趣は王朝以後の伝習で久しく日本化されて今日に至つたものだから、吾々くらいの子の年輩の日本人の頭からは、容易にこれを奪い去る事ができない。余は平生事に追われて簡易な俳句すら作らない。詩となると

億劫おつくうでなお手を下くださない。ただ斯か様に現実界を遠とほくに見て、杳はるかな心にすこしの蟠わだかまりのないときだけ、句も自然と湧わき、詩も興に乗じて種々な形のもとに浮んでくる。そうして後あとから顧みると、それが自分の生しょうがい涯うちの中で一番幸福な時期なのである。風流を盛るべき器うつわが、無作法ぶさほうな十七字と、佶屈きつくつな漢字以外に日本で発明されたらいざ知らず、さもなければ、余はかかる時、かかる場合に臨んで、いつでもその無作法とその佶屈とを忍んで、風流しやうりを這裏こゝに楽しんで悔いざるものである。そうして日本に他の恰かつこう好こうな詩形のないのを憾うらみとはけつして思わないものである。

六

始めて読書欲きよきの萌もした頃、東京の玄耳君げんじくんから小包で醉古堂すいこどう劍掃けんそうと列仙伝れつせんでんを送つてくれた。この列仙伝は帙ちついでり入いりの唐本とうほんで、少し手荒てあらいに取扱うと紙がぴりぴり破れそうに見えるほどの古い——古いと云うよりもむしろ汚ない——本であつた。余は寝ながらこの汚ない本を取り上げて、その中にある仙人の插画さしえを一々丁寧ていねいに見た。そうしてこれら仙人の髻ひげの模様だの、頭の恰かつこう好こうだのを互に比較して楽しんだ。その時は画工えかきの筆癖ひつへきから来る特

色を忘れて、こう云う頭の平らな男でなければ仙人になる資格がないのだろうと思つたり、またこう云う疎な髻を風に吹かせなければ仙人の群に入る事は覺束ないのだろうと思つたりして、ひたすら彼等の容貌に表われてくる共通な骨相を飽かず眺めた。本文も無論読んで見た。平生氣の短かい時にはとても見出す事のできない悠長な心をめでたく意識しながら読んで見た。——余は今の青年のうちに列仙伝を一枚でも読む勇氣と時間をもつているものは一人もあるまいと思う。年を取つた余も実を云うとこの時始めて列仙伝と云う書物を開けたのである。

けれども惜しい事に本文は挿画ほど雅に行かなかつた。中には欲の塊が羽化したような俗な仙人もあつた。それでも読んで行くうちには多少氣に入つたのもできてきた。一番無難作でかつおかしと思つたのは、何ぞと云うと、手の垢や鼻糞を丸めて丸薬を作つて、それを人にやる道楽のある仙人であつたが、今ではその名を忘れてしまった。

しかし挿画よりも本文よりも余の注意を惹いたのは巻末にある附録であつた。これは手輕にいうと長寿法とか養生訓とか称するものを諸方から取り集めて来て、いっしよに並べたもののように思われた。もつとも仙に化するための注意であるから、普通の深呼吸だの冷水浴だのとは違つて、すこぶる抽象的で、實際解るとも解らぬとも片のつかぬ

文字であるが、病中の余にはそれが面白かったと見えて、その二三節をわざわざ日記の中に書き抜いている。日記を検べて見ると「静これを性となせば心其中にあり、動これを心となせば性其中にあり、心生ずれば性滅し、心滅すれば性生ず」というようなむずかしい漢文が曲がりくねりに半頁ばかりを埋めている。

その時の余は印気の切れた万年筆の端を撮んで、ペン先へ墨の通うように一二度揮るのがすこぶる苦痛であった。實際健康な人が片手で檉の六尺棒を振り廻すよりも辛いくらいであった。それほど衰弱の劇しい時にですら、わざわざこんな道経めいた文句を写す余裕が心にあつたのは、今から考えても真に愉快である。子供の時聖堂の図書館へ通つて、徂徠の園十筆をむやみに写し取つた昔を、生涯にただ一度繰り返し得たような心持が起つて来る。昔の余の所作が単に写すという以外には全く無意味であつたごとく、病後の余の所作もまたほとんど同様に無意味である。そうしてその無意味なところに、余は一種の価値を見出して喜んでゐる。長生の工夫のための列仙伝が、長生もしかねまじきほど悠長な心の下に、病後の余からかく気楽に取扱われたのは、余に取つて全くの偶然であり、また再び来るまじき奇縁である。

仏蘭西の老画家アルピニーはもう九十一二の高齡である。それでも人並の気力はある

と見えて、この間のスチユージオには目醒めざましい木炭画が十種ほど載っていた。国朝こくちやうりく六家か詩鈔かししょうの初にある沈徳潜しんとくせんの序には、乾隆丁亥夏五けんりゆうていがいごちようしゅうしんとくせんしよ長洲ちやうしゅう沈徳潜書す時に年九十有五。とわざわざ断つてある。長生ながいきの結構な事は云うまでもない。長生をしてこの二人のように頭がたしかに使えるのはなおさらめでたい。不惑ふわくの齡よわいを越すと間もなく死のうとして、わずかに助かった余は、これからいつまで生きられるか固もとより分らない。思うに一日生いちじつせいきれば一日の結構で、二日生にじつせいきれば二日の結構であろう。その上頭かみが使えたらなおありがたいと云わなければなるまい。ハイズンは世間から二返へんも死んだと評判された。一度は弔詩ちやうしまで作つてもらつた。それにもかかわらず彼は依然として生きていた。余も当時はある新聞から死んだと書かれたそうである。それでも実は死なずにいた。そうして列仙伝れつせんでんを読んで子供の時の無邪気な努力を繰り返し得るほどに生き延びた。それだけでも弱い余に取つては非常な幸福である。その頃ある知らない人から、先生死にたもう事なかれ、先生死にたもうことなかれと書いた見舞を受けた。余は列仙伝れつせんでんを読むべく生き延びた余を悦よろこぶと同時に、この同情ある青年のために生き延びた余を悦よろこんだ。

ウオードの著わした社会学の標題には、ダイナミック力学的という形容詞をわざわざ冠かんしてあるが、これは普通の社会学でない、力学的に論じたのだという事を特に断つたものと思われる。ところがこの本のかつて魯西亜語ロシア語に翻訳された時、魯国ろこくの当局者は直ただちにその発売を禁止してしまった。著者は不審の念に打たれて、その理由を在魯ざいろの友人に聞き合せた。すると友人から、自分にもよくは分らぬが、おそらく標題に力学的という字と社会学ソシオロジーという字があるのだ、当局者は一も二もなくダイナマイト及び社会主義に關係のある恐ろしい著述と速断して、この暴挙をあえてしたのだらうという返事が来たそうである。

魯国の当局者ではないが、余もこの力学的という言葉には少からぬ注意を払つた一人である。平生から一般の学者がこの一字に着眼しないで、あたかも動きの取れぬ死物のように、研究の材料を取り扱いながらかえつて平氣でいるのを、常に飽あき足らず眺めていたのみならず、自分と親密の關係を有する文芸上の議論が、ことにこの弊へいに陥おちいりやすく、また陥りつつあるように見えるのを遺憾いかんと批判していたから、参考のため、一度は魯国当局者を恐れしめたというこの力学的社会学なるものを一読したいと思つていた。実は自分の恥はじを白状するようではなはだきまりが悪いが、これはけつして新しい本ではない。製本の体て

裁いさいからしてがすでにスペンサーの綜そう合ごう哲てつ学がくに類した古風なものである。けれどもまた恐ろしく分厚ぶんあつに書き上げた著作で、上下二巻を通じて千五百頁ほどある大冊子だから、四五日はおろか一週間かかっても楽に読みこなす事はでき悪いにく。それでやむをえず時機の来るまでと思つて、本箱の中へしまつておいたのを、小説類に興味を失しつしたこの頃の読物としては適当だろうとふと考えついたので、それを宅うちから取り寄せてとうとう力学的ダイナミックに社会学ソシオロジーを病院で研究する事にした。

ところが読み出して見ると、恐ろしく玄関の広い前置の長い本であつた。そうして肝かんじ心の社会学そのものになるとすこぶる不完全で、かつせつかくの頼みと思つているいわゆる力学的がはなはだ心細くなるほどに手荒に取扱われていた。今更ウオードの著述に批評を下くだすのは余の目的でない、ただついでに云うだけではあるが、今に本当の力学的が出るだろう、今に高潮の力学的が出るだろうと、どこまでも著者を信用して、とうとう千五百頁の最後の一頁の最後の文字まで読み抜けて、そうして期待したほどのものがどこからも出て来なかつた時には、ちょうどハレー彗すいせい星の尾で地球が包まれべき当日を、何の變化もなく無事に経過したほどあつけない心持がした。

けれども道中は、道草を食うべく余儀なくされるだけそれだけ多趣多様で面白かつた。

その中で宇宙創造論と云う厳めしい標題を掲げた所へ来た時、余は覚えす昔し学校で先生から教わった星雲説の記憶を呼び起して微笑せざるを得なかつた。そうしてふと考えた。

自分は今危険な病氣からやつと回復しかけて、それを非常な仕合のように喜んでゐる。そうして自分の癒りつつある間に、容赦なく死んで行く知名の人々や惜しい人々を今少し生かしておきたいとのみ冀つてゐる。自分の介抱を受けた妻や医者や看護婦や若い人達をありがたく思つてゐる。世話をしてくれた朋友やら、見舞に来てくれた誰彼やらには篤い感謝の念を抱いてゐる。そうしてここに人間らしいあるものが潜んでゐると信じてゐる。その証拠にはここに始めて生き甲斐のあると思われるほど深い強い快よい感じが漲つてゐるからである。

しかしこれは人間相互の關係である。よし吾々を宇宙の本位と見ないまでも、現在の吾々以外に頭を出して、世界のぐるりを見回さない時の内輪の沙汰である。三世に亘る生物全体の進化論と、(ことに)物理の原則に因つて無慈悲に運行し情義なく発展する太陽系の歴史を基礎として、その間に微かな生を営む人間を考えて見ると、吾らごときものの一喜一憂は無意味と云わんほどに勢力のないという事實に気がつかずにはいられない。

限りなき星霜を経て固まりかかった地球の皮が熱を得て溶解し、なお膨脹して瓦斯に変形すると同時に、他の天体もまたこれに等しき革命を受けて、今日まで分離して運行した軌道と軌道の間が隙間なく充たされた時、今の秩序ある太陽系は日月星辰の區別を失つて、爛たる一大火雲のごとくに盤旋するだろう。さらに想像を逆さまにして、この星雲が熱を失つて収縮し、収縮すると共に回転し、回転しながらに外部の一片を振りちぎりつつ進行するさまを思うと、海陸空気歴然と整えるわが地球の昔は、すべてこれえんえん々たる一塊の瓦斯に過ぎないという結論になる。面目の髣髴たる今日から溯つて、科学の法則を、想像だも及ばざる昔に引張れば、一糸も乱れぬ普遍の理で、山は山となり、水は水となつたものには違かならうが、この山とこの水とこの空気と太陽の御蔭によつて生息する吾ら人間の運命は、吾らが生くべき条件の備わる間の一瞬時——永劫に展開すべき宇宙歴史の長きより見たる一瞬時——を貪ほるに過ぎないのだから、はかないと云わんよりも、ほんの偶然の命と評した方が当っているかも知れない。

平生の吾らはただ人を相手にのみ生きてゐる。その生きるための空気については、あるのが当然だと思つていまだかつて心遣さえた事が無い。その心根を糺すと、吾らが生れる以上、空気は無ければならないはずだぐらいに観じてゐるらしい。けれども、こ

の空氣があればこそ人間が生れるのだから、實を云えば、人間のためにできた空氣ではなくて、空氣のためにできた人間なのである。今にもあれこの空氣の成分に多少の變化が起るならば、——地球の歴史はすでにこの變化を予想しつつある——活澆かつぼつなる酸素が地上の固形物と抱ほうごう合してしだいに滅却するならば、炭素が植物に吸収せられて黒い石炭層に運び去らるるならば、月げつき球きゅうの表面に瓦斯ガスのかからぬごとくに、吾らの世界もまた冷却し尽くすならば、吾らはことごとく死んでしまわねばならない。今の余のように生き延びた自分を祝い、遠く逝ゆく他人を悲しみ、友を懷なつかしみ敵にくを悪んで、内輪だけの活計かつけいに甘んじて得意にその日を渡る訳には行くまい。

——進んで無機有機を通じ、動植兩界を貫つらぬき、それらを万里一条の鉄のごとくに隙間すきまなく発展して来た進化の歴史と見倣みなすとき、そうして吾ら人類がこの大歴史中の単なる一頁ぺいじを埋むべき材料に過ぎぬ事を自覺するとき、百尺竿頭ひやくせきかんととうに上りつめたと自任する人間の自惚うぬぼれはまた急に脱落しなければならぬ。支那人が世界の地図を開いて、自分のいる所だけが中華でないと云う事を発見した時よりも、無氣味な黒船が来て日本だけが神国でないという事を覺つた時よりも、さらに溯さかのぼつては天動説が打ち壊されて、地球が宇宙の中心でなかつた事を無理に合点がてんせしめられた時よりも、進化論を知り、星雲説を想像する現代の

吾らは辛^{から}きジスイリユージョンを管^なめている。

種類保存のためには個々の滅亡を意とせぬのが進化論の原則である。学者の例証するところによると、一疋^{びき}の大口魚^{たら}が毎年生む子の数は百万疋とか聞く。牡蠣^{かき}になるとそれが二百万の倍数に上るといふ。そのうちで生長するのはわずか数匹^{すひき}に過ぎないのだから、自然は経済的に非常な濫^{らん}費^び者^{しゃ}であり、徳義上には恐るべく残酷な父^ふ母^ぼである。人間の生死も人間を本位とする吾らから云えば大事件に相違ないが、しばらく立場を易^かえて、自己が自然になり済ました気分^{ごう}で観察したら、ただ至^し当^{とう}の成行^{じやう}で、そこに喜^きびそこに悲^ひしむ理窟^{りくつ}は毫^{ごう}も存在^{そんざい}していないだろう。

こう考えた時、余ははなはだ心細^{こわ}くなつた。またはなはだつまらなくなつた。そこでこゝとさらに気分^{きぶん}を易^かえて、この間大磯^{おおいそ}で亡^なくなつた大塚夫人の事を思い出しながら、夫人のために手向^{たむけ}の句^くを作^{つく}つた。

有^ある程^{ほど}の菊^{きく}抛^なげ入^いれよ棺^{かん}の中

忘るべからざる八月二十四日の来る二週間ほど前から余はすでに病んでいた。縁側を絶えず通る湯治客に、吾姿を見せるのが苦になって、蒸し暑い時ですら障子は常に閉て切つていた。三度三度献立を持つて詔を聞きにくる婆さんに、二品三品口に合いそうなものも注文はしても、膳の上に揃つた皿を眺めると共に、どこからともなく反感が起つて、箸を執る気にはまるでなれなかつた。そのうちに嘔氣が来た。

始めは煎薬に似た黄黒い水をしたたかに吐いた。吐いた後は多少気分が癒るので、いささかの物は咽喉を越した。しかし越した嬉しさがまだ消えないうちに、またそのいささかの胃の滞うる重き苦しみに堪え切れなくなつて来た。そうしてまた吐いた。吐くものは大概水である。その色がだんだん變つて、しまいには緑青のような美しい液体になつた。しかも一粒の飯さえあえて胃に送り得ぬ恐怖と用心の下に、卒然として容赦なく食道を逆さまに流れ出た。

青いものがまた色を変えた。始めて熊の胆を水に溶き込んだように黒ずんだ濃い汁を、金盞になみなみと反した時、医者は眉を寄せて、こういうものが出るようでは、今のうち安静にして東京に帰つた方が好かろうと警告した。余は金盞の中を指していったい何が出るのかと質問した。医者は興のない顔つきで、これは血だと答えた。けれども余の眼

にはこの黒いものが血とは思えなかつた。するとまた吐いた。その時は熊の胆の色が少し紅くれないを含んで、咽喉なまくさを出る時なまくさ腥い臭におりがぷんと鼻を衝ついたので、余は胸を抑えながら自分で血だ血だと云つた。玄耳君げんじくんが驚ろいて森もり成なりさんに坂元君さかもとを添そえてわざわざ修善寺しゆぜんじまで寄こしてくれたのは、この報知が長距離電話で胃腸病院へ伝つたつて、そこからまた直すくに社へ通じたからである。別館から馳かけて来た東洋城とうようじょうが枕辺まくらべに立たつて、今日東京から医者と社員が来るはずになつたと知らしてくれた時は全く救われたような気がした。

この時の余はほとんど人間らしい複雑な命を有して生きてはいなかつた。苦痛のほかは何事をも容いれ得えぬほどに烈はげしく活動する胸を懐いだいて朝夕あさゆう悩んでいたのである。四十年来の経験を刻いんんでなお余りあると見えた余の頭脳は、ただこの截せつ然ぜんたる一苦痛を秒びとごとに深く印いんし来くるばかりを能事とするように思われた。したがって余の意識の内容はただ一ひと色の悶もだえに塗抹とまつされて、臍さい上方じょうほう三寸さんすんの辺あたりを日夜にうねうね行きつ戻りつするのみであつた。余は明け暮れ自分の身体からだの中で、この部分だけを早く切り取つて犬に投なげてやりたい気がした。それでなければこの恐ろしい単調な意識を、一刻も早くどこへか打ちやつてしまいたい気がした。またできるならば、このまま睡魔おかに冒おかれて、前後も知らず一週間ほど寝込んで、しかる後鷹揚おうような心持をゆたかに抱いて、爽さわやかな秋の日の光りに、両の

眼を颯と開けたかった。少くとも汽車に揺られもせず車に乗せられもせず、すうと東京へ帰って、胃腸病院の一室に這入って、そこに仰向けに倒れていたかった。

森成さんが来てもこの苦しみはちよつと除れなかつた。胸の中を棒で攪き混ぜられるような、また胃の腑が不規則な大波をその全面に向つて層々と描き出すような、異な心持に堪えかねて、床の上に起き返りながら、吐いて見ましようかと云つて、腥いものを面のあたり咽喉の奥から金盞の中に傾けた事もあつた。森成さんの御蔭でこの苦しみがだいぶ退いた時ですら、動くたびに腥い噫は常に鼻を貫ぬいた。血は絶えず腸に向つて流れていたのである。

この煩悶に比べると、忘るべからざる二十四日の出来事以後に生きた余は、いかに安住の地を得て静穩に生を営んだか分らない。その静穩の日がすなわち余の一生涯にあつて最も恐るべき危険の日であつたのだと云う事を後から知つた時、余は下のような詩を作つた。

円。覚。會。參。棒。喝。禪。
 瞎。兒。何。処。觸。機。緣。
 青。山。不。拒。庸。人。骨。
 回。首。九。原。月。在。天。

九

忘るべからざる二十四日の出来事を書こうと思つて、原稿紙に向いかけると、何だか急に気が進まなくなつたのでまた記憶を逆まに向け直して、後戻りをした。

東京を立つときから余は劇しく咽喉を痛めていた。いっしょに来るべきはずでつい乗り後れた東洋城の電報を汽車中で受け取つて、その意のごとくに御殿場で一時間ほど待ち合せていた間に、余は不用になつた一枚の切符代を割り戻して貰うために、駅長室へ這入つて行つた。するとそこに腰囲何尺とても形容すべきほど大きな西洋人が、椅子に腰をかけてしきりに絵端書の表に何か認めていた。余は駅長に向つて当用を弁ずる傍、思いがけない所に思いがけない人がいるものだという好奇心を禁じ得なかつた。するとその大男が突然立ち上がつて、あなたは英語を話すかと聞くから、嗚れた声でわずかにイエスと答えた。男は次にこれから京都へ行くにはどの汽車へ乗つたら好いか教えてくれと云つた。はなはだ簡単な用向であるから平生ならばどうとも挨拶ができるのだけれども、声量を全く失つていた当時の余には、それが非常の困難であつた。固より云う事はあるのだから、何か云おうとするのだが、その云おうとする言葉が咽喉を通るとき千条に擦り切

れでもするごとくに、口へ出て来る時分には全く光沢つやを失つてほとんど用をなさなかつた。余は英語に通ずる駅員の助たすけを藉かりて、ようやくのことこの大男を無事に京都へ送り届けた事とは思ふが、その時の不愉快はいまだに忘れない。

修善寺しゆぜんじに着いてからも咽喉のどはいっこう好くならなかつた。医者から藥を貰つたり、東洋城こしらの拵こしらえてくれた手製の含漱がんそうを用いたりなどして、辛からく日常の用を弁わざるだけの言葉を使つてすましていた。その頃修善寺には北白川きたしらかわの宮みやがおいになつていた。東洋城は始終しじゆうそちらの方つとめの務つとめに追われて、つい一丁ほどしか隔つていない菊屋の別館からも、容易に余の宿までは来る事ができない様子であつた。すべてを片づけてから、夜の十時過になつて、始めて蚊かやの外ひとこまで来て、一言見舞を云うのが常であつた。

そういう夜よの事であつたか、または昼の話であつたか今は忘れたが、ある時いつものように顔を合わせると、東洋城が突然、殿下からあなたに何か講話をして貰もらいたいという御注文があつたと云い出した。この思いがけない御所望ごしよぼうを耳にした余は少からず驚いた。けれども自分でさえ聞かずにすめば、聞かずにいたいような不愉快な声を出して、殿下に御話などをする勇氣はとも出なかつた。その上羽織はおりも袴はかまも持ち合せなかつた。そうして余のごとき位階のないものが、妄みだりに貴たつとい殿下の前に出てしかるべきであるかないかそれ

が第一分らなかつた。實際は東洋城も独断で先例のない事をあえてするのを憚つて、確とした御受はしなかつたのださうである。

余の苦痛が咽喉から胃に移る間もなく、東洋城は故郷にある母の病を見舞うべく、去る人と入れ代つてひとまず東京に歸つた。殿下もそれからほどなく御立になつた。そうして忘るべからざる二十四日の来た頃、東洋城は余に関する何の消息も知らずに、また東海道を汽車で西へ下つて行つた。その時彼は四五分の停車時間を偷んで、三島から余にわざわざ一通の手紙を書いた。その手紙は途中で紛失してしまつて、つい宿へ着かなかつたけれども、東洋城が御暇乞に上がった時、余の病気の事を御忘れにならなかつた殿下から、もし逢う機会があつたなら、どうか大事にするようにというような篤い意味の御言葉を承つたため、それをわざわざ病中の余に知らせたのださうである。咽喉の病も癒え、胃の苦しみも去つた今の余は、謹んで殿下に御礼を申上げなければならぬ。また殿下の健康を祈らなければならぬ。

雨がしきりに降った。裏山の絶壁を真逆まさかに下くだる筈かけいの竹が、青く冷たく光つて見えた幾日を、物憂ものうく室へやの中に呻しんぎん吟ぎんしつ々暮くしていた。人が寝静ねしずまると始めて夢を襲おそう（欄干らんかんから六尺余りの所を流れる）水の音も、風と雨に打ち消されて全く聞えなくなつた。そのうち水が出るとか出たとか云う声がどこからともなく耳に響いた。

お仙せんと云う下女が来て、昨夕ゆうべ桂川かつらがわの水が増したので門の前の小家こいえではおおかたの荷こしらを拵こしらえて、預けに来たという話をした。ついでにどこかでは家がまるで流されてしまつて、そうしてその家の宝物がどこかから掘り出されたと云う話もした。この下女は伊東の生れで、浜辺か畑中に立つて人を呼ぶような大きな声を出す癖のあるすこぶる殺風景な女であつたが、雨に鎖とぎされた山の中の宿屋で、こういう昔の物語めいた、嘘うそか真まことか分らないことを聞かされたときは、御伽噺おとぎばなしでも読んだ子供の時のような気がして、何となく古めかしい香においに包まれた。その上家が流されたのがどこで、宝物を掘出したのがどこか、まるで不明なのをいつこう構わずに、それが当然であるごとくに話して行く様子が、いかにも自分の今いる温泉ゆの宿を、浮世から遠くへ離隔りかくして、どんな便りたよも噂うわさのほかに這入はいつてこられない山里に変化してしまつたところに一種の面白味があつた。

とかくするうちにこの楽たのしい空想が、不便な事実となつて現れ始めた。東京から来る郵便

も新聞もことごとく後れ出した。たまたま着くものは墨がにじむほどびしょびしょに濡れていた。湿った頁を破けないように開けて見て、始めて都には今洪水が出盛っているとという報道を、鮮やかな活字の上にまのあたり見たのは、何日の事であったか、今たしかには覚えていないけれども、不安な未来を眼先に控えて、その日その日の出来栄を案じながら病む身には、けつして嬉しい便りではなかった。夜中に胃の痛みで自然と眼が覚めて、身体からだの置所がないほど苦しい時には、東京と自分とを繋ぐ交通の縁が当分切れたその頃の状態を、多少心細いものに観じない訳に行かなかった。余の病気は帰るには余り劇し過ぎた。そうして東京の方から余のいる所まで来るには、道路があまり打壊れ過ぎた。のみならず東京その物がすでに水に浸っていた。余はほとんど崖と共に崩れる吾家の光景と、茅が崎で海に押し流されつつある吾子供らを、夢に見ようとした。雨のしたたか降る前に余は妻さいに宛てて手紙を出しておいた。それには好い部屋がないから四五日したら帰ると書いた。また病気が再発して苦んでいると云う事はわざと知らせずにおいた。そうしてその手紙も着いたか着かないか分らないくらいに考えて寝ていた。

そこへ電報が来た。それは恐るべき長い時間と労力を費して、やっとの事無事に宛名の人に通ずるや否や、その宛名の人をして封を切らぬ先に少しはっと思わせた電報であった。

しかし中は、今度の水害でこちらは無事だが、そちらはどうかという、見舞と平信をかねたものに過ぎなかった。出した局の名が本郷とあるのを見てこれは草平君を煩わしたものと知った。

雨はますます降り続いた。余の病気はしだいに悪い方へ傾いて行つた。その時、余は夜の十二時頃長距離電話をかけられて、硬い胸を抑えながら受信器を耳に着けた。茅ヶ崎の子供も無事、東京の家も無事という事だけが微かに分つた。しかしその他は全く不得要領で、ほとんど風と話をするごとくに纏まらない雑音がぼうぼうと鼓膜に響くのみであつた。第一かけた当人がわが妻であるという事さえ覺らずにこちらからあなたという敬語を何遍か繰返したくらい漠然とした電話であつた。東京の音信が雨と風と洪水の中に、悩んでいる余の眼に始めて瞭然と映つたのは、坐る暇もないほど忙しい思いをした妻が、当時の事情をありのままに認めた巨細の手紙がようやく余の手に落ちた時の事であつた。余はその手紙を見て自分の病を忘れるほど驚いた。

病んで夢む天の川より出水かな

妻さいの手紙は全部の引用を許さぬほど長いものであった。冒頭に東洋城から余の病気の報知を受けた由と、それがため少からず心を悩ましている旨むねを記して、看病に行きたいにも汽車が不通で仕方がないから、せめて電話だけでもと思って、その日の中には通じかねるところを、無理な至急報にして貰もらつて、夜半やはんに山田の奥さんの所からかけたという説明が書いてあった。茅ヶ崎ちさきにいる子供の安否についても一ひと方かたならぬ心配をしたものらしかった。十間坂じっけんざか下という所は水害の恐れがないけれども、もし万一の事があれば、郵便局から電報で宅まで知らせて貰もらうはずになっていると、余に安心させるため、わざわざ断つてあった。そのほか市中たいていの平地は水害を受けて、現に江戸川通などは矢来やらいの交番の少し下まで浸つかつたため、舟に乗って往來ゆききをしているという報知も書き込んであった。しかしその頃は後おくれながらも新聞が着いたから、一般の模様は妻の便りがなくてもほほ分つていた。余の心を動かすべき現象は漠然はくぜんたる大社会の雨や水やと戦う有様にあると云うよりも、むしろ己おのれだけに密接の關係ある個人の消息にあった。そうしてその個人の二人までに、この雨と水が命の間際まぎわまで祟たつた顛末てんまつを、余はこの書面うづちの中に見出したのである。

一つは横浜に嫁とついだ妻の妹の運命に關した報知であった。手紙にはこう書いてある。

「……梅子事末の弟を伴れて塔の沢の福住へ参り居り候処、水害のため福住は浪に押し流され、浴客六十名のうち十五名行方不明との事にて、生死の程も分らず、如何とも致し方なく、横浜へは汽車不通にて参る事叶わず、電話は申込者多数にて一日を待たねば通じ不申……」

後には、いろいろ込み入った工面をして電話をかけた手続が書いてあつて、その末に会社の小使とかが徒歩で箱根まで探しに行つたあげく、幽霊のように哀れな姿をした彼女を伴れて戻つた模様が述べてあつた。余はそこまで読んで来て、つい二三日前宿の下女から、ある所で水が出て家が流されて、その家の宝物がまたある所から掘り出されたという昔話のような物語を聞きながら、その裏には自分と利害の糸を絡み合せなければならぬない恐ろしい事実が潜んでいるとも気がつかずに、尾頭もない夢とのみ打ち興じてすましていた自分の無智に驚いた。またその無智を人間に強いる運命の威力を恐れた。

もう一つ余の心を躍らしたのは、草平君に関する報知であつた。妻が本郷の親類で用を足した帰りとかに、水見舞のつもりで柳町の低い町から草平君の住んでいる通りまで来て、ここらだがと思いなから、表から奥を覗いて見ると、かねて見覚のある家がくしやりと潰れていたそうである。

「家の人達は無事ですか、どこへ行きましたかと聞いたら、薪屋の御上さんが、昨晚の十
二時頃に崖が崩れましたが、幸いにどなたも御怪我はございません。ひとまず柳町のこう
いう所へ御引移りになりましたと、教えてくれましたから、柳町へ来て見ると、まだ水の
引き切らない床下のびたびたに濡れた貸家に畳建具も何も入れずに、荷物だけ運んで
ありました。実に何と云って好いか憐れな姿でお種さんが、私の顔を見ると馳け出して来
ました。……晩の御飯を拵える事もできないだろうと思つて、御寿司を誂えて御夕飯の代
りに上げました……」

草平君は平生から崖崩れを恐れて、できるだけ表へ寄つて寝るとか聞いていたが、家の
潰れた時には、外のものがまるで無難であつたにもかかわらず、自分だけは少し顔へ怪我
をしたそうである。その怪我の事も手紙の中に書いてあつた。余はそれを読んで怪我だけ
でまず仕合せだと思つた。

家を流し崖を崩す凄まじい雨と水の中に都のものは幾万となく恐るべき叫び声を揚げた。
同じ雨と同じ水の中に余と関係の深い二人は身をもつて免れた。そうして余は毫も二人の
災難を知らずに、遠い温泉の村に雲と煙と、雨の糸を眺め暮していた。そうして二人の安
全であるという報知が着いたときは、余の病がしだいしだいに危険の方へ進んで行つた時

であつた。

風に聞け何れか先に散る木の葉

十二

つづく雨の或る宵に、すこし病の閑を偷んで、下の風呂場へ降りて見ると、半切を三尺ばかりの長に切つて、それを細長く豎に貼りつけた壁の色が、暗く映る灯の陰に、ふと余の視線を惹いた。余は湯壺の傍に立ちながら、身体を濡めす前に、まずこの異様の広告めいたものを読む氣になつた。真中に素人落語大会と書いて、その下に催主裸連と記してある。場所は「山荘にて」と断つて、催しのあるべき日取をその傍に書き添えた。余はすぐ裸連の何人なるかを覺り得た。裸連とは余の隣座敷にいる泊り客の自撰にかかると異なる名である。昨日の午襖越に聞いていると、太郎冠者がどうのこうのと長い評議の末、そこんとところでやるまいぞ、やるまいぞにしたら好いじやねえかと云うような相談があつた。その趣向は寝ている余とは固より無関係だから、知ろうはずもなかつたが、とにかくこの議決が山荘での催しに一異彩を加えた事はたしかに違ないと思つた。余は風

呂場の貼紙はりがみに注意してある日付と、裸連はだかれんの趣向を凝こらしていた時刻を照らし合せつつ、この落語会なるものの、すでに滞りとどこおなくすんだ昨日の午後を顧みて、裸連——少くとも裸連の首脳の構かたちづく成る隣座敷の泊り客……の成功を祝せざるを得なかつた。

この泊り客は五人連ごにんづれで一間ひとまに這入はいつていた。その中の一番年うち嵩としかさに見える三十代の男に、その妻君と娘を合せるとすでに三人になる。妻君は品のいい静かな女であつた。子供はなおさらおとなしかつた。その代り夫はすこぶる騒々しかつた。あとの二人はいずれも二十代の青年で、その一人は一行のうちでもつともやかましくふるまつていた。

誰でも中年以後になつて、二十一二時代の自分を眼の前に憶い浮べて見ると、いろいろ回想の簇むらがる中に、気恥きははずかしくて冷汗の流れそうな一断面を見出すものである。余は隣のへや呻吟しんげんしながら、この若い男の言葉使いや起居たちいを注意すべく余儀なくされた結果として、二十年の昔に経過した、自分の生しょうが涯がいのうちで、はなはだ不面目と思わざるを得ない生意気さ加減を今更のように恐れた。

この男は何の必要があつてか知らないけれども、絶えず大だい道どうで講演でもするよう大きな声を出して得意であつた。そうして下女が来ると、必ず通つう客かくめいた粹いきがりを連発した。それを隣となり坐敷ざしきで聞いていると、ウィットにもならなければヒューモーにもなつてい

ないのだから、いかにも無理やりに、（しかも大得意に、）半可もしくは四半可を殺風景に怒鳴りつけているとしか思われなかった。ところが下女の方では、またそれを聞くたびに不必要にふんだんな笑い方をした。本気とも御世辞とも片のつかない笑い方だけでも、声帯に異状のあるような恐ろしい笑い方をした。病気にのみ屈託する余も、これには少からず悩まされた。

裸連の一部は下座敷にもいた。すべてで九人いるので、自ら九人組とも称えていた。その九人組が丸裸になって幅六尺の縁側へ出て踊をおどって一晩跳ね廻った。便所へ行く必要があつて、障子の外へ出たら、九人組は躍り草臥れて、素裸のまま縁側に胡坐をかいていた。余は邪魔になる尻や脛の間を跨いで用を足して来た。

長い雨がようやく歇んで、東京への汽車がほぼ通ずるようになった頃、裸連は九人とも申し合せたように、どつと東京へ引き上げた。それと入れ代りに、森成さんと雪鳥君と妻とが前後して東京から来てくれた。そうして裸連のいた部屋を借り切った。その次の部屋もまた借り切った。しまいには新築の二階座敷を四間ともに吾有とした。余は比較的閑寂な月日の下に、吸飲から牛乳を飲んで生きていた。一度は匙で突き砕いた水瓜の底から湧いて出る赤い汁を飲まして貰った。弘法様で花火の揚つた宵は、縁近く寢床を

摺^ずらして、横になつたまま、初^{はつ}秋^{あき}の天^{そら}を夜^{やは}半^ん近^{ぢか}くまで見守^{みまも}つていた。そうして忘^わる^わべからざる二十四日の来るのを無意識に待つていた。

萩^{はぎ}に置く露の重きに病む身かな

十三

その日は東京から杉本さんが診察に来る手筈^{てはず}になつていた。雪鳥君が大^{おお}仁^{ひと}まで迎^{むか}へに出^でたのは何時頃か覚えていないが、山の中を照らす日がまだ山の下に隠れない午^{ひる}過^{すぎ}であつたと思う。その山の中を照らす日を、床を離れる事のできない、また室^{へや}を出る事の叶^{かな}わな
い余は、朝から晩までほとんど仰ぎ見た試しがないのだから、こう云うのも実は廂^{ひさし}の先に
余る空の端^{はし}だけを目^め当^{あて}に想像した刻^{こく}限^{げん}である。——余は修善寺^{しゆぜんじ}に二^{ふた}月^{つき}と五^{いつ}日^かほど滞
在しながら、どちらが東で、どちらが西か、どれが伊東へ越す山で、どれが下田へ出る街
道か、まるで知らずに歸つたのである。

杉本さんは予定のごとく宿へ着いた。余はその少し前に、妻^{さい}の手から吸^{すい}飲^{のみ}を受け取つて、細長い硝子^{ガラス}の口から生^{なま}温^{ぬる}い牛乳を一合ほど飲んだ。血が出てから、安静状態と流動

食事とは固く守らなければならぬ掟おきてのようになっていたからである。その上でできるだけ病人に營養を与えて、体力の回復の方から、潰瘍かいようの出血を抑えつけるという療治法を受けつつあつた際だから、否応いやおうなしに飲んだ。実を云うとこの日は朝から食欲きせきが萌もさなかつたので、吸飲の中に、動く事のできぬほど濁つた白い色の漲みなぎる様を見せられた時は、すぐと重苦しく舌の先に溜たまるしつ濃い乳の味を予想して、手に取らない前からすでに反感を起した。強いられた時、余はやむなく細長く反そり返かえつた硝子の管くだを傾けて、湯とも水とも捌さばけない液しるを、舌の上に注すらせようと試みた。それが流れて咽喉のどを下くだる後あとには、潔いさぎよからぬ粘ねばり強い香かが妄みだりに残のこつた。半分は口直しのつもりであとから氷クリームを一杯取つて貰もらつた。ところがいつもの爽さわやかに引ひき更かえて、咽喉のどを越こすときいったん溶とけたものが、胃の中で再び固かまつたように妙に落ちつきが悪わるかつた。それから二時間ほどして余は杉本さんの診察を受けたのである。

診察の結果として意外にもさほど悪くないと云う報告を得た時、平生森成さんから病気の質たちが面白くないと聞いていた雪鳥君は、喜びの余りすぐ社へ向けて好いという電報を打ってしまった。忘るべからざる八百グラムの吐血は、この吉報を逆襲ぎせきすべく、診察後一時間後の暮方に、突如として起つたのである。

かく多量の血を一度に吐いた余は、その暮方の光景から、日のない真夜中を通して、明日の天明に至る有様を巨細残らず記憶している気であった。程経て妻の心覚につけた日記を読んで見て、その中に、ノウヒンケツ（狼狽した妻は脳貧血をかくのごとく書いている）を起し人事不省に陥るとあるのに気がついた時、余は妻は枕辺に呼んで、当時の模様を委しく聞く事ができた。徹頭徹尾明瞭な意識を有して注射を受けたとのみ考えていた余は、実に三十分の長い間死んでいたのであった。

夕暮間近く、にわかには胸苦しいある物のために襲われた余は、悶えたさの余りに、せつかく親切に床の傍に坐つていてくれた妻に、暑苦しくていけないから、もう少しそつちへ退いてくれと邪慳に命令した。それでも堪えられなかつたので、安静に身を横うべき医師からの注意に背いて、仰向の位地から右を下に寝返ろうと試みた。余の記憶に上らない人事不省の状態は、寝ながら向を換えにかかつたこの努力に伴う脳貧血の結果だと云う。余はその時さつと迸しる血潮を、驚ろいて余に寄り添おうとした妻の浴衣に、べつとり吐きかけたそうである。雪鳥君は声を顫わしながら、奥さんすっかりしなくてははいけませんと云ったそうである。社へ電報をかけるのに、手が戦いて字が書けなかつたそうである。医師は追っかけ追っかけ注射を試みたそうである。後から森成さんにその数を聞いたら、

十六筒とうまでは覚えていますと答えた。

淋。漓。絳。血。腹。中。文。 嘔。照。黃。昏。漾。綺。紋。

入。夜。空。疑。身。是。骨。 臥。牀。如。石。夢。寒。雲。

十四

眼を開けて見ると、右向になつたまま、瀬戸引せとびきの金盃かなだらひの中に、べつとり血を吐いていた。金盃が枕に近く押付けてあつたので、血は鼻の先に鮮かに見えた。その色は今日こんにち日までのように酸の作用を蒙こうむつた不明瞭ふめいりょうなものではなかつた。白い底に大きな動物の肝きものごとくどろりと固まつていたように思う。その時枕元で含嗽うがいを上げましょうという森成さんの声が聞えた。

余は黙つて含嗽うがいをした。そうして、つい今しがた傍そばにいる妻に、少しそつちへ退いてくれと云つたほどの煩悶はんもんが忽然こつぜんどこかへ消えてなくなつた事を自覚した。余は何より先にまあよかつたと思つた。金盃に吐いたものが鮮血であろうと何であろうと、そんな事はいつこう気にかからなかつた。日頃からの苦痛くたまりの塊を一度にどきりと打ちやり切つたとい

う落ちつきをもつて、枕元の人がざわざわする様子をほとんどよそごとのように見ていた。余は右の胸の上部に大きな針を刺されてそれから多量の食塩水を注射された。その時、食塩を注射されるくらいだから、多少危険な容ようだい体たいに逼せまっているのだろうとは思ったが、それもほとんど心配にはならなかった。ただ管くだの先から水が洩もれて肩の方へ流れるのが厭いやであつた。左右の腕にも注射を受けたような気がした。しかしそれは確はつきり然ぜん覚えていない。

妻さいが杉本さんに、これでも元のようになるでしょうかと聞く声が耳に入った。さよう潰いか瘍いようではこれまで随分多量の血を止とめた事もあります。……と云う杉本さんの返事が聞えた。すると床の上に釣つるした電気灯がぐらぐらと動いた。硝子ガラスの中に彎わんきよく曲ました一本の光が、線香煙花せんこうはなびのように疾とく閃きらめいた。余は生れてからこの時ほど強くまた恐ろしく光力を感じた事がなかつた。その咄嗟とつさの刹那せつなにすら、稲妻いなずまを眸ひとみに焼やきつけるとはこれだと思つた。時に突然電気灯が消えて気が遠くなつた。

カンフル、カンフルと云う杉本さんの声が聞えた。杉本さんは余の右の手頸てくびをしかと握つていた。カンフルは非常によく利きくね、注射し切らない内から、もう反響があると杉本さんがまた森成さんに云つた。森成さんはええと答えたばかりで、別にはかばかしい返事はしなかつた。それからすぐ電気灯に紙おおいの蔽おおいをした。

傍がひとしきり静かになった。余の左右の手頸は二人の医師に絶えず握られていた。その二人は眼を閉じている余を中に挟んで下のような話をした（その単語はことごとく独逸語であった）。

「弱い」

「ええ」

「駄目だろう」

「ええ」

「子供に会わしたらどうだろう」

「そう」

今まで落ちついていた余はこの時急に心細くなった。どう考えても余は死にたくなかったからである。またけつして死ぬ必要のないほど、楽な気持でいたからである。医師が余を昏睡の状態にあるものと思い誤つて、忌憚なき話を続けているうちに、未練な余は、瞑目不動の姿勢にありながら、半無気味な夢に襲われていた。そのうち自分の生死に関する斯様に大胆な批評を、第三者として床の上にじつと聞かせられるのが苦痛になって来た。しまいには多少腹が立った。徳義上もう少しは遠慮してもよきそうなものだと思つた。

ついに先がそう云う料簡りょうけんならこつちにも考えがあるとこの気になった。——人間が今死のうとしつつある間際まぎわにも、まだこれほどに機略ろくを弄し得るものかと、回復期に向つた時、余はしばしば当夜の反抗心を思い出しては微笑ほほえんでいる。——もつとも苦痛が全く取れて、安臥あんがの地位を平静に保つていた余には、充分それだけの余裕があつたのであろう。

余は今まで閉じていた眼を急に開けた。そうしてできるだけ大きな声と明瞭めいりょうな調子で、私は子供などに会いたくはありませんと云つた。杉本さんは何事をも意に介せぬごとく、そうですかと軽く答えたのみであつた。やがて食いかけた食事を済まして来るとか云つて室へやを出て行つた。それから左右の手を左右に開いて、その一つずつを森成さんと雪鳥君に握られたまま、三人とも無言のうちに天明に達した。

冷やかな脈まもを護りぬ夜明方よあけがた

十五

強しいて寝返りねがえを右に打とうとした余と、枕元の金盃かなだらひに鮮血かみげを認めた余とは、一分いちぶの隙すきもなく連続しているとのみ信じていた。その間には一本の髪毛かみげを挟む余地のないまでに、

自覚が働いて来たとのみ心得ていた。ほど経て妻から、そうじゃありません、あの時三十分ばかりは死んでいらしたのですと聞いた折は全く驚いた。子供のとき悪戯をして気絶をした事は二三度あるから、それから推測して、死とはおおかたこんなものだろうぐらにはかねて想像していたが、半時間の長き間、その経験を繰返しながら、少しも気がつかずに一カ月あまりを当然のごとくに過したかと思うと、はなはだ不思議な心持がする。

実を云うとこの経験——第一経験と云い得るかが疑問である。普通の経験と経験の間に挟まって毫もその連結を妨げ得ないほど内容に乏しいこの——余は何と云ってそれを形容していかついに言葉に窮してしまふ。余は眠から醒めたという自覚さえなかった。陰から陽に出たとも思わなかつた。微かな羽音、遠きに去る物の響、逃げて行く夢の匂い、古い記憶の影、消える印象の名残——すべて人間の神秘を叙述すべき表現を数え尽してようやく髣髴すべき靈妙な境界を通過したとは無論考えなかつた。ただ胸苦しくなつて枕の上の頭を右に傾むけようとした次の瞬間に、赤い血を金盞の底に認めただけである。

その間に入り込んだ三十分の死は、時間から云つても、空間から云つても経験の記憶として全く余に取つて存在しなかつたと一般である。妻の説明を聞いた時余は死とはそれほどはかないものかと思つた。そうして余の頭の上にしかく卒然と閃めた生死二面の対照の、

いかにも急劇でかつ没交渉なのに深く感じた。どう考えてもこの懸隔かけへだつた二つの現象に、同じ自分が支配されたとは納得できなかつた。よし同じ自分が咄嗟とつさの際に二つの世界を横断したにせよ、その二つの世界がいかなる関係を有するがために、余をしてたちまち甲から乙に飛び移るの自由を得せしめたかと考えると、茫然ぼうぜんとして自失せざるを得なかつた。生死とは緩急かんきゆう、大小、寒暑と同じく、対照の連想からして、日常一束ひとたばに使用される言葉である。よし軌近ばんきんの心理学者の唱うるごとく、この二つのものもまた普通の対照と同じく同類連想の部に属すべきものと判ずるにしたところで、かく掌を翻てのひらえすと一般に、唐突とうとつなるかけ離れた二象フエーゼス面が前後して我を擒とりこにするならば、我はこのかけ離れた二象面を、どうして同性質のものとして、その関係を迹付けあとづける事ができよう。

人が余に一個の柿を与えて、今日は半分喰え、明日あすは残りの半分の半分を喰え、その翌あくる日ひはまたその半分の半分を喰え、かくして毎日現に余れるものの半分ずつを喰えと云うならば、余は喰い出してから幾日いくかめ目か、ついにこの命令に背そむいて、残る全部をことごとく喰い尽すか、または半分に割る能力の極度に達したため、手を拱こまぬいて空しく余れる柿のこの一片いっぺんを見つめなければならぬ時機ときが来るだろう。もし想像の論理を許すならば、この条件もとの下に与えられたる一個の柿は、生涯しょうがい喰つても喰い切れる訳がない。希臘ギリシヤの昔

ゼノが足の疾ときアキリスと歩みの鈍のろい亀との間に成立する競争に辞ことばを託して、いかなるアキリスもけつして亀に追いつく事はできないと説いたのは取も直さずこの消息である。わが生活の内容を構かたちづく成る個々の意識もまたかくのごとくに、日ごとか月ごとに、その半なかばずつを失つて、知らぬ間にいつか死に近づくならば、いくら死に近づいても死ねないと云う非事実な論理に愚弄ぐろうされるかも知れないが、こう一足飛びに片方から片方に落ち込むような思索上の不調和を免まぬかれて、生から死に行く径路けいろを、何の不思議もなく最も自然に感じ得るだろう。俄然がぜんとして死し、俄然として吾われに還かえるものは、否、吾に還つたのだと、人から云い聞かされるものは、ただ寒くなるばかりである。

縹。縹。玄。黄。外。 死。生。交。謝。時。 寄。託。冥。然。去。

我。心。何。所。之。 歸。來。覓。命。根。 杳。杳。

孤。愁。空。遶。夢。 宛。動。肅。瑟。悲。 江。山。秋。已。老。

粥。葉。※。 廓。寥。天。尚。在。 高。樹。獨。余。枝。

晚。懷。如。此。澹。 風。露。入。詩。遲。

安らかな夜はしだいに明けた。室を包む影法師が床を離れて遠退くに従って、余はまた常のごとく枕辺に寄る人々の顔を見る事ができた。その顔は常の顔であった。そうして余の心もまた常の心であった。病のどこにあるかを知り得ぬほどに落ちついた身を床の上に横えて、少しだに動く必要をもたぬ余に、死のなお近く徘徊していようとは全く思い設けぬところであつた。眼を開けた時余は昨夕の騒ぎを（たとい忘れないまでも）ただ過去の夢のごとく遠くに眺めた。そうして死は明け渡る夜と共に立ち退いたのだらうぐらいの度胸でも据つたものと見えて、何らの掛念もない気分を、障子から射し込む朝日の光に、心地よく曝していた。実は無知な余を詐わり終せた死は、いつの間にか余の血管に潜り込んで、乏しい血を追い廻しつつ流れていたのだそうである。「容体を聞くと、危険なれどごく安静にしていれば持ち直すかも知れぬという」とは、妻のこの日の朝の部に書き込んだ日記の一句である。余が夜明まで生きようとは、誰も期待していなかったのだとは後から聞いて始めて知つた。

余は今でも白い金盞の底に吐き出された血の色と恰好とを、ありありとわが眼の前に思い浮べる事ができる。ましてその当分は寒天のように固まりかけた腥いものが常

に眼先に散らついていた。そうして吾が想像に映る血の分量と、それに起因した衰弱とを比較しては、どうしてあれだけの出血が、こう劇しく身体に應えるのだらうといつでも不審に堪えなかつた。人間は脈の中の血を半分失うと死に、三分の一失うと昏睡するものだと聞いて、それに吾とも知らず妻の肩に吐きかけた生血の容積を想像の天秤に盛つて、命の向う側に重りとして付け加えた時ですら、余はこれほど無理な工面をして生き延びたのだとは思えなかつた。

杉本さんが東京へ帰るや否や、——杉本さんはその朝すぐ東京へ帰つた。もつとおりが忙がしいから失礼します、その代り手当は充分するつもりでありますと云つて、新しい襟と襟飾を着け易えて、余の枕辺に坐つたとき、余は昨夕夜半に、袴丈の足りない宿の浴衣を着たまま、そつと障子を開けながら、どうかと一言森成さんに余の様子を聞いていた彼人の様子を思い出した。余の記憶にはただそれだけしかとまらなかつた杉本さんが、出がけに妻を顧みて、もう一遍吐血があれば、どうしても回復の見込はないものと御諦めなさらなければいけませんと注意を与えたそうである。実は昨夕にもこの恐るべき再度の吐血が来そうなので、わざわざモルヒネまで注射してそれを防ぎ止めたのだとは、後になつてその顛末を審らかにした余に取つて、全く思いがけない報知であ

つた。あれほど胸の中は落ちついていたものと云いたいくらいに、余は平常の心持で苦痛なくその夜を明したのである。——話がつい外れてしまった。

杉本さんは東京へ帰るや否や、自分で電話を看護婦会へかけて、看護婦を二人すぐ余の出先へ送るように頼んでくれた。その時、早く行かんと間に合わないかも知れないからと電話口で急いたので、看護婦は汽車で走る途々も、もういけない頃ではなからうかと、絶えず余の生命に疑いを挟さんでいた。せつかく行つても、行き着いて見たら、遅過ぎて間に合わなかつたと云うような事があつてはつまらないと語り合つて来た。——これも回復期に向いた頃、病牀の徒然に看護婦と世間話をしたついでに、彼等の口からじかに聞いたたよりである。

かくすべての人に十の九まで見放された真中に、何事も知らぬ余は、曠野に捨てられた赤子のごとく、ぼかんとしていた。苦痛なき生は余に向つて何らの煩悶をも与えなかつた。余は寝ながらただ苦痛なく生きておるといふ一事実を認めるだけであつた。そうしてこの事実が、はからざる病のために、周囲の人の丁重な保護を受けて、健康な時に比べると、一步浮世の風の当り悪い安全な地に移つて来たように感じた。実際余と余の妻とは、生存競争の辛い空気が、直に通わない山の底に住んでいたのである。

露けさの里にて静なる病しずかやまい

十七

臆病者の特権として、余はかねてより妖怪ようかいに逢あう資格があると思つていた。余の血の中には先祖の迷信が今でも多量に流れている。文明の肉が社会の鋭むちどき鞭もとの下に萎縮いしゆくするとき、余は常に幽霊を信じた。けれども虎烈刺コレラを畏おそれて虎烈刺に罹かからぬ人のごとく、神に祈つて神に棄すてられた子のごとく、余は今日きょうまでこれと云う不思議な現象に遭遇する機会もなく過ぎた。それを残念と思うほどの好奇心もたまには起るが、平生はまず出逢であわぬのを当然と心得てすまして来た。

自白すれば、八九年前アンドリュ・ラングの書いた「夢と幽霊」という書物を床の中に読んだ時は、鼻の先の灯とも火しびを一時に寒く眺めた。一年ほど前にも「靈妙なる心力」と云う標題に引かされてフランマリオンという人の書籍を、わざわざ外国から取り寄せた事があつた。先頃はまたオリヴァー・ロツジの「死後の生」を読んだ。

死後の生！ 名からしてがすでに妙である。我々の個性が我々の死んだ後のちまでも残る、

活動する、機会があれば、地上の人と言葉を換す。スピリチズムの研究をもって有名であったマイエルはたしかにこう信じていたらしい。そのマイエルに自己の著述を捧げたロツジも同じ考えのように思われる。ついこの間出たポドモアの遺著もおそらくは同系統のものであろう。

ドイツのフエヒナーは十九世紀の中頃すでに地球その物に意識の存すべき所以を説いた。石と土と鉱に靈があると云うならば、有るとするを妨げる自分ではない。しかしせめてこの仮定から出立して、地球の意識とは如何なる性質のものであろうぐらいの想像はあつてしかるべきだと思ふ。

吾々の意識には敷居のような境界線があつて、その線の下は暗く、その線の上は明らかであるとは現代の心理学者が一般に認識する議論のように見えるし、またわが経験に照らしても至極と思われるが、肉体と共に活動する心的現象に斯様の作用があつたにしろで、わが暗中の意識すなわちこれ死後の意識とは受取れない。

大いなるものは小さいものを含んで、その小さいものに気がついてはいるが、含まれたる小さいものは自分の存在を知るばかりで、己らの寄り集つて拵らえている全部に対しては風馬牛のごとく無頓着であるとは、ゼームスが意識の内容を解き放したり、また結び

合せたりして得た結論である。それと同じく、個人全体の意識もまたより大いなる意識の中に含まれながら、しかもその存在を自覚せずに、孤立するごとくに考えているのだろうとは、彼がこの類推るいすいより下くだし来るスピリチズムに都合よき仮定である。

仮定は人々の随意であり、また時にとつて研究上必要の活力でもある。しかしただ仮定だけでは、いかに臆病の結果幽霊を見ようとする、また迷信の極きよく不可思議を夢みんとする余も、信力をもつて彼らの説を奉ずる事ができない。

物理学者は分子の容積を計算して蚕かいこの卵にも及ばぬ（長さ高さともに一ミリメートルの）立方体に一千万を三乗した数が這入ると断言した。一千万を三乗した数とは一の下に零れいを二十一付けた莫ぼくだい大なものである。想像を恣ほしまにする権利を有する吾々われわれもこの一の下に二十一の零を付けた数を思い浮べるのは容易でない。

形而下けいじかの物質界にあつてすら、——相当の学者が綿密な手続を経て発表した数字上の結果すら、吾々はただ数理的の頭脳にのみもつともと首肯うなずくだけである。数量のあらましさえ応用の利かぬ心の現象に関しては云うまでもない。よし物理学者の分子に対することき明めい瞭りょうな知識が、吾人の内面生活を照らす機会が来たにいたるところで、余の心はついに余の心である。自分に経験のできない限り、どんな綿密な学説でも吾を支配する能力は持

ち得まい。

余は一度死んだ。そうして死んだ事実を、平生からの想像通りに経験した。はたして時間と空間を超越した。しかしその超越した事が何の能力をも意味しなかった。余は余の個性を失った。余の意識を失った。ただ失った事だけが明白なばかりである。どうして幽霊となれよう。どうして自分より大きな意識と冥合できよう。臆病にしてかつ迷信強き余は、ただこの不可思議を他人に待つばかりである。

迎火を焚いて誰待つ紹の羽織

十八

ただ驚ろかれたのは身体の変化である。騒動のあつた明る朝、何かの必要に促がされて、^{あばら}肋の左右に横たえた手を、顔の所まで持つて来ようとすると、急に持主でも変つたように、自分の腕ながらまるで動かなかつた。人を煩らわす手数を厭つて、無理に肘を杖として、^{てくび}手頸から起しかけたはかけたが、わずか何寸かの距離を通して、宙に短かい弧線を描く努力と時間とは容易のものでなかつた。ようやく浮き上つた筋の力を利用して、高い方へ引

くだけの精気に乏しいので、途中から断念して、再び元の位置にわが腕を落そうとすると、それがまた安くは落ちなかつた。無論そのままにして心を放せば、自然の重みでもとに倒れるだけの事ではあるが、その倒れる時の激動が、いかに全身に響き渡るかと考えると、非常に恐ろしくなつて、ついに思い切る勇氣が出なかつた。余はおろす事も上げる事も、また半途に支える事もできない腕を意識しつつそのやりどころに窮した。ようやく傍はたのもの気がついて、自分の手をわが手に添えて、無理のないように顔の所まで持つて来てくれて、帰りにもまた二つ腕をいっしょにしてやつと床とこの上まで戻した時には、どうしてかう自己が空虚になつたものか、我ながらほとんど想像がつかなかつた。後から考えて見て、あれは全く護謨風船ゴムふうせんに穴あが開いて、その穴から空氣が一度に走り出したため、風船の皮がたちまちしゅつという音と共に収縮したと一般の吐血だから、それでああ身体からだに応えたのだらうと判断した。それにしても風船はただ縮ちぢまるだけである。不幸にして余の皮は血液のほかには大きな長い骨をたくさんに包んでいた。その骨が――

余は生れてより以来この時ほど吾骨の硬さを自覚した事がない。その朝眼が覚めた時の第一の記憶は、実にわが全身に満ち渡る骨の痛みの声であつた。そうしてその痛みが、宵よひに、酒を被こつた勢いきおいで、多数を相手に劇はげしい喧嘩けんかを挑いどんだ末、さんざんに打ち据すえられて、

手も足も利かなくなつた時のごとくに吾を鈍く叩きこなしていた。砧に擣たれた布は、こ
うもあろうかとまで考えた。それほど正体なくきめつけられ了つた状態を適当に形容する
には、ぶちのめすと云う下等社会で用いる言葉が、ただ一つあるばかりである。少しでも
身体を動かそうとすると、関節がみしみしと鳴つた。

昨日まで狭い布団に劃された余の天地は、急にまた狭くなつた。その布団のうちの一部
分よりほかに出る能力を失つた今の余には、昨日まで狭く感ぜられた布団がさらに大きく
見えた。余の世界と接触する点は、ここに至つてただ肩と背中と細長く伸べた足の裏側に
過ぎなくなつた。——頭は無論枕に着いていた。

これほどに切りつめられた世界に住む事すら、昨夕は許されそうに見えなかつたのにと、
傍のものは心の中で余のために観じてくれたらう。何事も弁えぬ余にさえそれが憐れであ
つた。ただ身の布団に触れる所のみがわが世界であるだけに、そうしてその触れる所が少
しも変らないために、我と世界との関係は、非常に単純であつた。全くスタチック（静）
であつた。したがつて安全であつた。綿を敷いた棺の中に長く寝て、われ棺を出でず、人
棺を襲わざる亡者の気分は——もし亡者に気分が有り得るならば、——この時の余のそ
れと余りかけ隔つてはいなかつたらう。

しばらくすると、頭が麻痺しびれ始めた。腰の骨が骨だけになって板の上に乗せられているような気がした。足が重くなつた。かくして社会的の危険から安全に保証された余いちにん一人の狭い天地にもまた相応の苦しみができた。そうしてその苦痛を逃れるのがべく余は一寸のほかにさえ出る能力を持たなかつた。枕元にどんな人がどうして坐すわっているか、まるで気がつかなかつた。余を看護するために、余の視線の届かぬ傍かたわらを占めた人々の姿は、余に取つて神のそれと一般であつた。

余はこの安らかながら痛み多き小世界にじつと仰あおむけ向に寝たまま、身の及ばざるところに時々眼を走らした。そうして天てんじょう井から釣つた長い氷ひょうのう囊の糸をしばしば見つめた。その糸は冷たい袋と共に、胃の上でぴくりぴくりと鋭どい脈を打っていた。

朝寒あささむや生きたる骨を動かさず

十九

余はこの心持をどう形容すべきかに迷う。

力を商あきないにする相撲すもうが、四つに組んで、かつきり合つた時、土俵の真中に立つ彼等の姿

は、存外静かに落ちついている。けれどもその腹は一分と経たないうちに、恐るべき波を上下に描かなければやまない。そうして熱そうな汗の球が幾条となく背中を流れ出す。最も安全に見える彼等の姿勢は、この波とこの汗の辛うじて齎らす努力の結果である。静かなのは相剋する血と骨の、わずかに平均を得た象徴である。これを互殺の和という。二三十秒の現状を維持するに、彼等がどれほどの気魄を消耗せねばならぬかを思うとき、見る人は始めて残酷の感を起すだろう。

自活の計に追われる動物として、生を営む一点から見た人間は、まさにこの相撲のごとく苦しいものである。吾らは平和なる家庭の主人として、少くとも衣食の満足を、吾らと吾らの妻子とに与えんがために、この相撲に等しいほどの緊張に甘んじて、日々自己と世間との間に、互殺の平和を見出そうと力めつつある。戸外に出て笑うわが顔を鏡に映すならば、そうしてその笑いの中に殺伐の気に充ちた我を見出すならば、さらにこの笑いに伴う恐ろしき腹の波と、背の汗を想像するならば、最後にわが必死の努力の、回向院のそれのように、一分足らずで引分を期する望みもなく、命のあらん限は一生涯かなければならないという苦しい事実に想い至るならば、我等は神経衰弱に陥るべき極度に、わが精力を消耗するために、日に生き月に生きつつあるとまで言いたくなる。

かく単に自活自營の立場に立つて見渡した世の中はことごとく敵である。自然は公平で冷酷な敵である。社会は不正で人情のある敵である。もし彼对我の觀を極端に引延ばすならば、ほうゆう朋友もある意味において敵であるし、妻子もある意味において敵である。そう思う自分さえ日に何度となく自分の敵になりつつある。疲れてもやめえぬ戦いを持続しながら、けいぜん然として独りひとその間に老ゆるものは、みじめ見慘と評するよりほかに評しようがない。

古臭い愚痴ぐちを繰返すなどという声がしきりに聞えた。今でも聞える。それを聞き捨てにして、古臭い愚痴を繰返すのは、しみじみそう感じたからばかりではない、しみじみそう感じた心持を、急に病気が来て顛くつがえ覆したからである。

血を吐いた余は土俵の上に仆れた相撲と同じ事であった。自活のために戦う勇氣は無論、戦わねば死ぬという意識さえ持たなかった。余はただ仰向けあおむに寝て、わずかな呼吸いきをあえてしながら、こわ怖い世間を遠くに見た。病気が床の周囲ぐるりを屏風びょうぶのように取り巻いて、寒い心を暖かにした。

今までは手を打たなければ、わが下女さえ顔を出さなかった。人に頼まなければ用は弁じなかった。いくらしようと焦慮あせつても、とどの調わない事が多かった。それが病気になる、がらりと変った。余は寝ていた。黙って寝ていただけである。すると医者^がが来た。社員^がが

来た。妻さいが来た。しまいには看護婦が二人来た。そうしてことごとく余の意志を働かさないうちに、ひとりでに来た。

「安心して療養せよ」と云う電報が満洲から、血を吐いた翌日に来た。思いがけない知己ちぎや朋友が代る代る枕まくらもと元もとに来た。あるものは鹿児島から来た。あるものは山形から来た。またあるものは眼の前に逼せまる結婚を延期して来た。余はこれらの人に、どうして来たと聞いた。彼等は皆新聞で余の病氣を知つて来たと云つた。仰あおむけ向むけに寝た余は、天井を見つめながら、世の人は皆自分より親切なものだと思つた。住すみ悪にくいとのみ観じた世界にたちまち暖かな風が吹いた。

四十を越した男、自然に淘汰とうたせられんとした男、さしたる過去を持たぬ男に、忙いそがしい世が、これほどの手間と時間と親切をかけてくれようとは夢にも待設けなかつた余は、病やまいに生き還かえると共に、心に生き還つた。余は病に謝した。また余のためにこれほどの手間と時間と親切とを惜しまざる人々に謝した。そうして願わくは善良な人間になりたいと考えた。そうしてこの幸福な考えをわれに打うちこわ壊す者を、永久の敵とすべく心に誓つた。

馬。上。青。年。老。鏡。中。白。髮。新。

幸。生。天。子。国。願。作。太。平。民。

二十

ツルゲニエフ以上の芸術家として、有力なる方面の尊敬を新たにしつつあるドストイエフスキーには、人の知るごとく、小供の時分から癩癩てんかんの発作ほつきがあつた。われら日本人は癩癩と聞くと、ただ白い泡を連想するに過ぎないが、西洋では古くこれを神聖なる疾やまいと称えていた。この神聖なる疾やまいに冒おかされる時、あるいはその少し前に、ドストイエフスキーは普通の人が大音楽を聞いて始めて到いたり得るような一種微妙の快感に支配されたそうである。それは自己と外界との円満に調和した境地で、ちょうど天体の端から、無限の空間に足を滑すべらして落ちるような心持だとか聞いた。

「神聖なる疾」に罹かかつた事のない余は、不幸にしてこの年になるまで、そう云う趣おもむきに一瞬間も捕われた記憶をもたない。ただ大吐血後五六日——経たつか経たないうちに、時々一種の精神状態おちいに陥おちいつた。それからは毎日のように同じ状態を繰り返した。ついには来ぬ先にそれを予期するようになった。そうして自分とは縁の遠いドストイエフスキーの享うけたと云う不可解の歓喜をひそかに想像してみた。それを想像するか思い出すほどに、余の精神

状態は尋常を飛び越えていたからである。ドクインセイの細かに書き残した驚くべき阿片の世界も余の連想に上った。けれども読者の心目を眩惑するに足る妖麗な彼の叙述が、鈍い色をした卑しむべき原料から人工的に生れたのだと思うと、それを自分の精神状態に比較するのが急に厭になつた。

余は当時十分と続けて人と話をする煩わしさを感じた。声となつて耳に響く空気の波が心に伝つて、平らかな気分をことさらに騒つかせるように覺えた。口を閉じて黄金なりという古い言葉を思い出して、ただ仰向けに寝ていた。ありがたい事に室の廂と、向うの三階の屋根の間に、青い空が見えた。その空が秋の露に洗われつつしだいに高くなる時節であつた。余は黙つてこの空を見つめるのを日課のようにした。何事もない、また何物もないこの大空は、その静かな影を傾むけてことごとく余の心に映じた。そうして余の心にも何事もなかつた。また何物もなかつた。透明な二つのものがぴたりと合つた。合つて自分に残るのは、縹緲とでも形容してよい気分であつた。

そのうち穏かな心の隅が、いつか薄く暈されて、そこを照らす意識の色が微かになつた。すると、ヴェイルに似た靄が軽く全面に向つて万遍なく展びて来た。そうして総体の意識がどこもかしこも稀薄になつた。それは普通の夢のように濃いものではなかつた。尋常

の自覚のように混雑したものでもなかった。またその中間に横わる重い影でもなかった。魂が身体を抜けると云つてはすでに語弊がある。靈が細かい神経の末端にまで行き届つて、泥でできた肉体の内部を、軽く清くすると共に、官能の実覚から杳かに遠からしめた状態であつた。余は余の周囲に何事が起りつつあるかを自覚した。同時にその自覚が窺窺として地の臭を帯びぬ一種特別のものであると云う事を知つた。床の下に水が廻つて、自然と畳が浮き出すように、余の心は己の宿る身体と共に、蒲団から浮き上がった。より適当に云えば、腰と肩と頭に触れる堅い蒲団がどこかへ行つてしまつたのに、心と身体は元の位置に安く漂つていた。発作前に起るドストイェフスキーの歓喜は、瞬刻のために十年もしくは終生の命を賭しても然るべき性質のものとか聞いている。余のそれはさように強烈のものではなかった。むしろ恍惚として幽かな趣を生活面の全部に軽くかつ深く印し去つたのみであつた。したがつて余にはドストイェフスキーの受けたような憂鬱性の反動が来なかつた。余は朝からしばしばこの状態に入った。午過にもよくこの蕩漾を味つた。そうして覚めたときはいつでもその楽しい記憶を抱いて幸福の記念としたくらいであつた。

ドストイェフスキーの享け得た境界は、生理上彼の病のまさに至らんとする予言で

ある。生を半なに薄なめた余の興致は、単に貧血の結果であつたらしい。

仰臥人如唾。
默然見大空。
大空雲不動。
終日杳相同。

二十一

同じドストイエフスキーもまた死の門かどぐち口まで引き摺ずられながら、辛かろうじて後戻りをする事のできた幸福な人である。けれども彼の命を危あやめにかかつた災わざわいは、余の場合におけるがごとき悪あく辣らつな病気ではなかつた。彼は人の手に作り上げられた法と云う器械の敵となつて、どんと心臓を打ち貫ぬかれようとしたのである。

彼は彼の倶楽部クラブで時事を談じた。やむなくんばただ一揆いっきあるのみと叫んだ。そうして囚とらわれた。八カ月の長い間薄うすく暗い獄舎の日光に浴したのち、彼は蒼空あおぞらの下もとに引き出され、新たに刑壇の上に立つた。彼は自己の宣告を受けるため、二十一度の霜しもに、襯衣シャツ一枚の裸はだか姿すがたとなつて、申渡もうしわたの終るのを待った。そうして銃殺に処すの一句を突然として鼓膜こまくに受けた。「本当に殺されるのか」とは、自分の耳を信用しかねた彼が、傍かたわらに立つ

同 囚どうしゆうに問うた言葉である。……白い手帛ハンケチを合図に振った。兵士は覗ねらいを定めた銃口つつぐちを下に伏せた。ドストイエフスキーはかくして法律の捏こね丸めた熱い鉛なまりたまの丸のを吞のまずにすんだのである。その代り四年の月日をサイベリヤの野に暮した。

彼の心は生から死に行き、死からまた生に戻つて、一時間と経たたぬうちに三たび鋭どいい曲折を描いた。そうしてその三段落が三段落ともに、妥協を許さぬ強い角度で連結された。その変化だけでも驚くべき経験である。生きつつあると固く信ずるものが、突然これから五分のうちに死ななければならぬと云う時、すでに死ぬときまつてから、なお余る五分の命を提ひっさげて、まさに来きたるべき死を迎えながら、四分、三分、二分と意識しつつ進む時、さらに突き当ると思つた死が、たちまちとんぼ返りを打つて、新たに生と名づけられる時、——余のごとき神経質ではこの三象フエーズ面のの一つにすら堪たえ得まいと思う。現にドストイエフスキーと運命を同じくした同囚いちにんの一人は、これがためにその場で気が狂つてしまつた。

それにもかかわらず、回復期に向つた余は、病牀びようしやうの上に寝ながら、しばしばドストイエフスキーの事を考えた。ことに彼が死の宣告から蘇よみがえつた最後の一幕を眼に浮べた。——寒い空、新しい刑壇、刑壇の上に立つ彼の姿、襯衣一枚のまま顛ふるえている彼の姿、

——ことごとく鮮やかな想像の鏡に映った。独り彼が死刑を免かれたと自覚し得た咄嗟の表情が、どうしても判然映らなかつた。しかも余はただこの咄嗟の表情が見たいばかりに、すべての画面を組み立てていたのである。

余は自然の手に罹つて死のうとした。現に少しの間死んでいた。後から当時の記憶を呼び起した上、なおところどころの穴へ、妻から聞いた顛末を埋めて、始めて全くでき上る構図をふり返つて見ると、いわゆる慄然と云う感じに打たれなければやまなかつた。その恐ろしさに比例して、九 仞に失つた命を一簣に取り留める嬉しさはまた特別であつた。この死この生に伴う恐ろしさと嬉しさが紙の裏表のごとく重なつたため、余は連想上常にドストイエフスキーを思い出したのである。

「もし最後の一節を欠いたなら、余はけつして正気ではいられなかつたらう」と彼自身が物語っている。気が狂うほどの緊張を幸いに受けずとすんだ余には、彼の恐ろしさ嬉しさの程度を料り得ぬと云う方がむしろ適当かも知れぬ。それであればこそ、画竜点睛とも云うべき肝心の刹那の表情が、どう想像しても漠として眼の前に描き出せないのだから。運命の擒縦を感じる点において、ドストイエフスキーと余とは、ほとんど詩と散文ほどの相違がある。

それにもかかわらず、余はしばしばドストイエフスキーを想像してやまなかつた。そうして寒い空と、新しい刑壇と、刑壇の上に立つ彼の姿と、襯衣一枚で顫えている彼の姿とを、根気よく描き去り描き来つてやまなかつた。

今はこの想像の鏡もいつとなく曇つて来た。同時に、生き返つたわが嬉しさが日に日にわれを遠ざかつて行く。あの嬉しさが始終終わが傍にあるならば、——ドストイエフスキーは自己の幸福に対して、生涯感謝する事を忘れぬ人であつた。

二十二

余はうとうとしながらいつの間にか夢に入った。すると鯉の跳ねる音でたちまち眼が覚めた。

余が寝ている二階座敷の下はすぐ中庭の池で、中には鯉がたくさんに飼つてあつた。その鯉が五分に一度ぐらいは必ず高い音を立ててぱしやりと水を打つ。昼のうちでも折々は耳に入った。夜はことに甚しい。隣りの部屋も、下の風呂場も、向うの三階も、裏の山もことごとく静まり返つた真中に、余は絶えずこの音で眼を覚ました。

犬の眠りと云う英語を知ったのはいつの昔か忘れてしまったが、犬の眠りと云う意味を
実地に経験したのはこの頃が始めてであった。余は犬の眠りのために夜ごと悩まされた。
ようやく寝ついてありがたいと思う間もなく、すぐ眼が開いて、まだ空は白まないだろう
かと、幾度も暁を待ち侘びた。床に縛りつけられた人の、しんとした夜半に、ただ独り
生きている長さは存外な長さである。——鯉が勢よく水を切った。自分の描いた波の上を
叩く尾の音で、余は眼を覚ました。

室の中は夕暮よりもなお暗い光で照らされていた。天井から下がっている電気灯の珠は
黒布で隙間なく掩がしてあった。弱い光りはこの黒布の目を洩れて、微かに八畳の室を
射た。そうしてこの薄暗い灯影に、真白な着物を着た人間が二人坐っていた。二人とも口
を利かなかつた。二人とも動かなかつた。二人とも膝の上へ手を置いて、互いの肩を並べ
たままじつとしていた。

黒い布で包んだ球を見たとき、余は紗で金箔を巻いた弔旗の頭を思い出した。この
喪章と関係のある球の中から出る光線によって、薄く照らされた白衣の看護婦は、静か
なる点において、行儀の好い点において、幽霊の雛のように見えた。そうしてその雛は必
要のあるたびに無言のまま必ず動いた。

余は声も出さなかつた。呼びもしなかつた。それでも余の寝ている位置に、少しの変化さえあれば彼等はきつと動いた。手を毛布けつとのうちで、もじつかせても、心持肩を右から左へ揺ゆつても、頭を——頭は眼が覚さめるたびに必ず麻痺しびれていた。あるいは麻痺れるので眼が覚めるのかも知れなかつた。——その頭を枕の上で一寸いっすん摺ずらしても、あるいは足——足はよく寢覚ねざめの種となつた。平生ふだんの癖で時々、片かた方かたを片方の上へ重ねて、そのままとろとろとなると、下になつた方の骨が沢庵石たくわんいしでも載せられたように、みしみしと痛んで眼が覚めた。そうして余は必ず強い痛さと重たさとを忍んで足の位置を変えなければならなかつた。——これらのあらゆる場合に、わが変化に應じて、白い着物の動かない事はけつしてなかつた。時にはわが動作を予期して、向うから動くと思われる場合もあつた。時には手も足も頭も動かさないのに、眠りが尽きてふと眼を開けさえすれば、白い着物はすぐ顔そばの傍へ来た。余には白い着物を着ている女の心持が少しも分らなかつた。けれども白い着物を着ている女は余の心を善よく悟とつた。そうして影の形したかに随したがうごとくに變化した。響ひびの物に應ずるごとくに働はたらいた。黒い布ぬのの目から洩もれる薄暗い光の下もとに、真白な着物を着た女が、わが肉体の先せんを越して、ひそひそと、しかも規則正しく、わが心のままに動くのは恐ろしいものであつた。

余はこの気味の悪い心持を抱いて、眼を開けると共に、ぼんやり眸ひとみに映る室へやの天井を眺めた。そうして黒い布で包んだ電気灯の珠たまと、その黒い布の織目から洩れてくる光に照らされた白い着物を着た女を見た。見たか見ないうちに白い着物が動いて余に近づいて来た。

秋風鳴万木。 山雨撼高楼。
 病骨稜如劍。 一灯青欲愁。

二十二

余は好意の干乾ひからびた社会に存在する自分をはなはだぎごちなく感じた。

人が自分に対して相応の義務を尽くしてくれるのは無論ありがたい。けれども義務とは仕事に忠実なる意味で、人間を相手に取った言葉でも何でもない。したがって義務の結果に浴する自分は、ありがたいと思いつつも、義務を果たした先方に向つて、感謝の念おもを起し悪い。それが好意となると、相手の所作しよさが一挙一動ごとく自分を目的にして働いてくるので、活物いきものの自分にその一挙一動がごとく応こたえる。そこに互つなを繋ぐ暖い糸があつて、器械的な世を頼母たのもしく思わせる。電車に乗つて一区またたを瞬またたく間に走るよりも、人の背

に負われて浅瀬を越した方が情が深い。

義務さえ素直には尽くして呉れる人のない世の中に、また自分の義務さえ碌に尽くしもしない世の中に、こんな贅沢を並べるのは過分である。そうとは知りながら余は好意の干乾びた社会に存在する自分を切にぎごちなく感じた。——或る人の書いたものの中に、余りせち辛い世間だから、自用车を節儉する格で、当分良心を質に入れたとあつたが、質に入れるのは固より一時の融通を計る便宜に過ぎない。今の大多数は質に置くべき好意さえ天で持っているものが少なそうに見えた。いかに工面がついても受出そうとは思えなかつた。とは悟りながらやはり好意の干乾びた社会に存在する自分をぎごちなく感じた。

今の青年は、筆を執つても、口を開いても、身を動かしても、ことごとく「自我の主張」を根本義にしている。それほど世の中は切りつめられたのである。それほど世の中は今の青年を虐待しているのである。「自我の主張」を正面から承れば、小憎しい申し分が多い。けれども彼等をしてこの「自我の主張」をあえてして憚るところなきまでに押しつめたものは今の世間である。ことに今の経済事情である。「自我の主張」の裏には、首を縊つたり身を投げたりすると同程度に悲惨な煩悶が含まれている。ニーチェは弱い男であつた。多病な人であつた。また孤独な書生であつた。そうしてザラツストラはかくのご

とく叫んだのである。

こうは解釈するようなものの、依然として余は常に好意の干乾びた社会に存在する自分をぎごちなく感じた。自分が人に向ってぎごちなくふるまいつつあるにもかかわらず、自らぎごちなく感じた。そうして病に罹った。そうして病の重い間、このぎごちなさをどこへか忘れた。

看護婦は五十グラムの粥をコップの中に入れて、それを鯛味噌と混ぜ合わせて、一匙ずつ自分の口に運んでくれた。余は雀の子か鳥の子のような心持がした。医師は病の遠ざかるに連れて、ほとんど五日目ぐらいごとに、余のために食事の献立表を作った。ある時は三通りも四通りも作って、それを比較して一番病人に好きそうなものを撰んで、あとはそれぎり反故にした。

医師は職業である。看護婦も職業である。礼も取れば、報酬も受ける。ただで世話をしていない事はもちろんである。彼等をもつて、単に金銭を得るが故に、その義務に忠実なるのみと解釈すれば、まことに器械的で、実も蓋もない話である。けれども彼等の義務の中に、半分の好意を溶き込んで、それを病人の眼から透かして見たら、彼等の所作がどれほど尊とくなるか分らない。病人は彼等のもたらす一点の好意によって、急に生きて来る

からである。余は当時そう解釈して独りで嬉しかった。そう解釈された医師や看護婦も嬉しかろうと思う。

子供と違つて大人は、なまじい一つの物を十筋二十筋の文からできたように見窮める力があるから、生活の基礎となるべき純潔な感情を恣のままに吸収する場合が極めて少ない。本当に嬉しかった、本当にありがたかった、本当に尊かつたと、生涯に何度思えるか、勘定すれば幾何もない。たとい純潔でなくても、自分に活力を添えた当時のこの感情を、余はそのまま長く余の心臓の真中に保存したいと願っている。そうしてこの感情が遠からず単に一片の記憶と変化してしまいそうなのを切に恐れている。——好意の干乾びた社会に存在する自分をはなはだぎごちなく感ずるからである。

天。下。自。多。事。
 被。吹。天。下。風。
 高。秋。悲。鬢。白。
 衰。病。夢。顔。紅。
 送。鳥。天。無。尽。
 看。雲。道。不。窮。
 残。存。吾。骨。貴。
 慎。勿。妄。磨。※。

二十四

小供のとき家に五六十幅の画があつた。ある時は床の間の前で、ある時は蔵の中で、またある時は虫干の折に、余は交る交るそれを見た。そうして懸物の前に独り蹲踞まつて、黙然と時を過すのを樂とした。今でも玩具箱を引繰り返したように色彩の乱調な芝居を見るよりも、自分の氣に入つた画に對している方が遙かに心持が好い。

画のうちでは彩色を使った南画が一番面白かつた。惜しい事に余の家の蔵幅にはその南画が少なかつた。子供の事だから画の巧拙などは無論分ろうはずはなかつた。好き嫌いと言つたところで、構図の上に自分の氣に入つた天然の色と形が表われていればそれで嬉しかつたのである。

鑑識上の修養を積む機会をもたなかつた余の趣味は、その後別段に新らしい変化を受けないで生長した。したがつて山水によつて画を愛するの弊はあつたらうが、名前によつて画を論ずるの譏りも犯さずにすんだ。ちようど画を前後して余の嗜好に上つた詩と同じく、いかな大家の筆になつたものでも、いかに時代を食つたものでも、自分の氣に入らないものはいつこゝろ顧みる義理を感じなかつた。(余は漢詩の内容を三分して、いたくその一分を愛すると共に、大いに他の一分をけなしている。残る三分の一に對しては、好むべきか悪むべきかはずれとも意見を有していない。)

ある時、青くて丸い山を向うに控えた、また的てきれきと春に照る梅を庭に植えた、また柴さ門いもんの真前まんなえを流れる小河を、垣に沿うて緩く繞ゆるめくらした、家を見て——無論画絹えぎぬの上に——どうか生涯しょうがいに一遍で好いからこんな所に住んで見たいと、傍そばにいる友人に語った。友人は余の真面目まじめな顔をしけじけ眺めて、君こんな所に住むと、どのくらい不便なものだか知っているかとさも気の毒そうに云った。この友人は岩手いわてのものであった。余はなるほどと始めて自分の迂濶うかつを愧はずると共に、余の風流心に泥を塗った友人の實際的なのを悪んだ。

それは二十四五年も前の事であった。その二十四五年の間に、余もやむをえず岩手出身の友人のようにしだいに實際的になった。崖がけを降りて溪川たにがわへ水を汲みに行くよりも、台所へ水道を引く方が好くなくなった。けれども南面に似た心持は時々夢を襲った。ことに病氣になつて仰向あおむけに寝てからは、絶えず美しい雲と空が胸に描かれた。

すると小宮君が歌麿うたまろの錦絵にしきえを葉書に刷すつたのを送つてくれた。余はその色合いろあひの長い間に自おのずと寂さびたくすみ方に見惚みとれて、眼を放さずそれを眺めていたが、ふと裏を返すと、私はこの画の中にあるような人間に生れたいとか何とか、当時の自分の情調とは似ても似つかぬ事が書いてあつたので、こんなやつこい色いろおとこ男おとこは大嫌だいきらひだ、おれは暖かな秋

の色とその色の中から出る自然の香が好きだと答えてくれと傍のものに頼んだ。ところが今度は小宮君が自身で枕元へ坐つて、自然も好いが人間の背景にある自然でなくつちやかとか何とか病人に向つて古臭い説を吐きかけるので、余は小宮君を捕えて御前は青二才だののしと罵つた。——それくらい病中の余は自然を懐かしく思つていた。

空が空の底に沈み切つたように澄んだ。高い日が蒼い所を目の届くかぎり照らした。余はその射返しいかえの大地に洽ねき内あまにしんとして独りひと温ぬくもつた。そうして眼の前に群がる無数の赤蜻蛉あかとんぼを見た。そうして日記に書いた。——「人よりも空、語よりも黙もく。……肩に来て人懐かしや赤蜻蛉あかとんぼ」

これは東京へ帰つた以後の景色である。東京へ帰つたあともしばらくは、絶えず美しくい自然の画が、子供の時と同じように、余を支配していたのである。

秋露下南※。 黄花粲照顔。

欲行沿澗遠。 却得与雲還。

子供が来たから見てやれと妻が耳の傍へ口を着けて云う。身体を動かす力がないので余は元の姿勢のままただ視線だけをその方に移すと、子供は枕を去る六尺ほどの所に坐っていた。

余の寝ている八畳に付いた床の間は、余の足の方にあった。余の枕元は隣の間を仕切る襖で半塞いであった。余は左右に開かれた襖の間から敷居越しに余の子供を見たのである。頭の上の方にいるものを室を隔てて見る視力が、不自然な努力を要するためか、そこに坐っている子供の姿は存外遠方に見えた。無理な一瞥の下に余の眸に映った顔は、逢うたと記すよりもむしろ眺めたと書く方が適當なくらい離れていた。余はこの一瞥よりほかにまた子供の影を見なかつた。余の眸はすぐと自然の角度に復した。けれども余はこの一瞥の短きうちにすべてを見た。

子供は三人いた。十二から十、十から八つと順に一行になつて隣座敷の真中に並ばされていた。そうして三人ともに女であつた。彼等は未来の健康のため、一夏を茅が崎に過すべく、父母から命ぜられて、兄弟五人で昨日まで海辺を駆け廻っていたのである。父が危篤の報知によつて、親戚のものに伴れられて、わざわざ砂深い小松原を引き上げて、修善寺まで見舞に来たのである。

けれども危篤の何を意味しているかを知るには彼らはあまり小さ過ぎた。彼らは死と云う名前を覚えていた。けれども死の恐ろしさと怖さとは、彼らの若い額の奥に、いまだかつて影さえ宿さなかつた。死に捕えられた父の身体が、これからどう変化するか彼らには想像ができなかつた。父が死んだあとで自分らの運命にどんな結果が来るか、彼らには無論考え得られなかつた。彼らはただ人に伴われて父の病氣を見舞うべく、父の旅先まで汽車に乗って来たのである。

彼らの顔にはこの会見が最後かも知れぬと云う愁の表情がまるでなかつた。彼らは親子の哀別以上に無邪気な顔をもっていた。そうしていろいろ人のいる中に、三人特別な席に並んで坐らせられて、厳肅な空気にじつと行儀よく取りすまず窮屈を、切なく感じているらしく思われた。

余はただ一瞥の努力に彼らを見ただけであつた。そうして病を解し得ぬ可憐な小さいものを、わざわざ遠くまで引張り出して、殊勝に枕元に坐らせておくのをかえつて残酷に思った。妻を呼んで、せつかく来たものだから、そこいらを見物させてやれと命じた。もしその時の余に、あるいはこれが親子の見納めになるかも知れないと云う懸念があつたならば、余はもう少ししみじみ彼らの姿を見守つたかも知れなかつた。しかし余は医師や

傍はたのものが余に對して抱かかいていたような危険を余の病の上に自みづから感じていなかったのである。

子供はじきに東京へ歸つた。一週間ほどしてから、彼らは各々めいめいに見舞状を書いて、それを一つ封に入れて、余の宿に届けた。十二になる筆子ふでこのは、四角な字を入れた整わないそつろうぶん候まじり文で、「御祖母様おばばさまが雨がふつても風がふいても毎日毎日一日もかかさず御しやか様おまいりへ御詣おひやくどを遊ばす御百度おひやくどをなされ御父様の御病氣一日も早く御全快を祈り遊ばされまた高田の御伯母様おんおばどこかの御宮へか御詣り遊ばすとのことごせうろうに御座候ごせうろうふさ、きよみ、むめの三人の連中は毎日猫の墓へ水をとるかえ花を差し上げて早く御父様の全快を御祈りに居り候」とあつた。十とおになる恒子つねこのは尋常であつた。八やっになるえい子えいこのは全く片仮名だけで書いてあつた。字を埋うめて読みやすくと、「御父様の御病氣はいかがでございますか、私は無事に暮しておりますから御安心なさいませ。御父様も私の事を思わずに御病氣を早く直して早く御歸りなさいませ。私は毎日休まずに学校へ行つて居ります。また御母様によろしく」と云うのである。

余は日記の一頁ページを寝ながら割きいて、それに、留守の中うちはおとなしく御祖母様おばばさまの云う事を聞かなくてはいけない、今いまについでであつた時修善寺しゆぜんじの御土産おみやげを届けてやるからと書い

て、すぐ郵便で妻に出さした。子供は余が東京へ帰ってから、平気で遊んでいる。修善寺の土産はもう壊してしまつたらう。彼等が大きくなつたとき父のこの文を読む機会がもしあつたなら、彼等のはたしてどんな感じがするだらう。

傷心秋已到。嘔血骨猶存。

病起期何日。夕陽還一村。

二十六

五十グラムと云うと日本の二勺半にしか当たらない。ただそれだけの飲料で、この身体を終日持ち応えていたかと思えば、自分ながら気の毒でもあるし、可愛らしくもある。また馬鹿らしくもある。

余は五十グラムの葛湯を恭やしく飲んだ。そうして左右の腕に朝夕二回ずつの注射を受けた。腕は両方とも針の痕で埋まつていた。医師は余に今日はどつちの腕にするか聞いた。余はどつちにもしたくなかつた。薬液を皿に溶いたり、それを注射器に吸い込ましたり、針を丁寧ていねいに拭ぬぐつたり、針の先に泡のように細かい薬を吹かして眺めたりする注射

の準備ははなはだ物奇麗ものぎれいで心持が好いけれども、その針を腕にぐさと刺して、そこへ無理に薬を注射するのは不愉快でたまらなかつた。余は医師に全体その鳶色とびいろの液は何だと聞いた。森成もりなりさんはブンベルンとかブンメルンとか答えて、遠慮なく余の腕を痛がらせた。

やがて日に二回の注射が一回に減じた。その一回もまたしばらくすると廃やめになつた。そうして葛湯の分量が少しずつ増して来た。同時に口の中が執拗しゆうねく粘り始めた。爽さわやかな飲料で絶えず舌と顎あごのどを洗つていなくてはいたたまれなかつた。余は医師に氷を請求した。医師は固い片かけらが滑すべつて胃の腑ふに落ち込む危険を恐れた。余は天井てんじようを眺めながら、腹膜炎を患わずらつた廿歳はたちの昔を思い出した。その時は病氣に障さわるとかで、すべての飲物を禁ぜられていた。ただ冷水で含嗽うがいをするだけの自由を医師から得たので、余は一時間のうちに、何度となく含嗽をさせて貰つた。そうしてそのつど人に知れないように、そつと含嗽の水を幾分かずつ胃の中に飲み下して、やつと熬いりつくような渴かわきまぎを紛まぎらしていた。昔はかりごとの計を繰り返す勇氣のなかつた余は、口こうちゆう中ちゆうを潤うるおすための氷を齒で噛み砕くだいては、正直に残らず吐き出した。その代り日に数回平野水ひらのすいを一口ずつ飲まして貰う事にした。平野水がくんくんと音を立てるような勢で、食道から胃へ落ちて行く時の心持は痛快であ

った。けれども咽喉を通り越すや否やすぐとまた飲みたくなつた。余は夜半にしばしば看護婦から平野水を洋盃コップに注いで貰つて、それをありがたそうに飲んだ當時をよく記憶している。

渴かつはしだいに歇やんだ。そうして渴よりも恐ろしい餓ひもじさが腹の中を荒して歩くようになった。余は寝ながら美しい食しよく膳ぜんを何なん通りとなく想像で拵こしらえて、それを眼の前に並べて楽しんでいた。そればかりではない、同じ猷こんだて立たてを何人前とどのも調べておいて、多数の朋友にそれを想像で食わして喜こんだ。今考えると普通のもの嬉しがるといふような食物くいものはちつともなかつた。こう云う自分にすらあまりありがたくはない御膳おぜんばかりを眼の前に浮べていたのである。

森成さんがもう葛湯くすゆも厭あきたらうと云つて、わざわざ東京から米を取り寄せて重湯おもゆを作つてくれた時は、重湯を生れて始めて啜すする余には大いな期待があつた。けれども一口飲んで始めてその不味まずいのに驚ろいた余は、それぎり重湯というものを近づけなかつた。その代りカジノビスケットを一片ひときれ貰つた折の嬉うれしさはいまだに忘れられない。わざわざ看護婦を医師の室へやまでやつて、特に礼を述べたくらいである。

やがて粥かゆを許された。その旨うまさはただの記憶となつて冷やかに残っているだけだから実

感としては今思い出せないが、こんな旨いものが世にあるかと疑いつつ舌を鳴らしたのは確かである。それからオートミールが来た。ソーダビスケットが来た。余はすべてをありがたく食った。そうして、より多く食いたいと言う事を日課のように繰り返して森成さんに訴えた。森成さんはしまいに余の病床に近づくのを恐れた。東君ひがしくんはわざわざ妻さいの所へ行つて、先生はあんなもつともな顔をしている癖に、子供のように始終しじゅう食物くいものの話ばかりしていておかしいと告げた。

腸はらわたに春滴したたるや粥の味

二十七

オイツケンとは精神生活と云う事を真向まむきに主張する学者である。学者の習慣として、自己の説を唱となうる前には、あらゆる他のイズムを打破する必要を感じるものと見えて、彼は彼のいわゆる精神生活を新たならしむるため、その用意として、現代生活に影響を与うる在来からの処生上の主義に一も二もなく非難を加えた。自然主義もやられる、社会主義も叩たたかれる。すべての主義が彼の眼から見て存在の権利を失ったかのごとくに説き去られた時、

彼は始めて精神生活の四字を拈出した。そうして精神生活の特色は自由である、自由であると連呼した。

試みに彼に向つて自由なる精神生活とはどんな生活かと問えば、端的にこんなものだとはけつして答えない。ただ立派な言葉を秩序よく並べ立てる。むずかしそうな理窟を蝨と幾重にも重ねて行く。そこに学者らしい手際はあるかも知れないが、とぐろの中に巻き込まれる素人は茫然してしまふだけである。

しばらく哲学者の言葉を平民に解るように翻訳して見ると、オイツケンのいわゆる自由なる精神生活とは、こんなものではなからうか。——我々は普通衣食のために働らいている。衣食のための仕事は消極的である。換言すると、自分の好悪撰択を許さない強制的の苦しみを含んでいる。そう云う風にほから押しつけられた仕事では精神生活とは名づけられない。いやしくも精神的に生活しようと思ふなら、義務なきところに向つて自ら進む積極のものでなければならぬ。束縛によらずして、己れ一個の意志で自由に営む生活でなければならぬ。こう解釈した時、誰も彼の精神生活を評してつまらないとは云うまい。コムトは倦怠をもつて社会の進歩を促がす原因と見たくらいである。倦怠の極やむをえずして仕事を見つげ出すよりも、内に抑えがたき或るものが蟠まつて、じつと持ち応え

られない活力を、自然の勢から生命の波動として描出し来る方が實際実の入った生き法と云わなければなるまい。舞踏でも音楽でも詩歌でも、すべて芸術の価値はここに存していると言しても差支えない。

けれども学者オイツケンの中の頭の中で纏め上げた精神生活が、現に事実となつて世の中に存在し得るや否やに至つては自から別問題である。彼オイツケン自身が純一無雑に自由なる精神生活を送り得るや否やを想像して見ても分る。明な話ではないか。間断なきこの種の生活に身を託せんとする前に、吾人は少なくとも早くすでに職業なき閑人として存在しなければならぬはずである。

豆腐屋が氣に向いた朝だけ石臼を回して、心の機まないときはけつして豆を挽かなかつたなら商買にはならない。さらに進んで、己れの好いた人だけに豆腐を売つて、いけない客をことごとく謝絶したらなおの事商買にはならない。すべての職業が職業として成立するためには、店に公平の灯を点けなければならぬ。公平と云う美しそうな徳義上の言葉を裏から言い直すと、器械的と云う醜い本体を有しているに過ぎない。一分の遅速なく発着する汽車の生活と、いわゆる精神的な生活とは、正に両極に位する性質のものでなければならぬ。そうして普通の人は十が十までこの両端を七分三分とか六分四分とか

に交まぜ合あわして自己べんぎに便宜べんぎなようにまた世間よに都合ごの好よいように（すなわち職業し業ぎに忠実しんじつなように）生活せいかつすべく天てんから余儀あまなくされている。これが常態じょうたいである。たまたま芸術げいぎゆつの好よきなものが、好よきな芸術げいぎゆつを職業し業ぎとするような場合ばいですら、その芸術げいぎゆつが職業し業ぎとなる瞬間しゆんにおいて、真まことの精神生活しんしんせいかつはすでに汚けがされてしまいうのは当然たうぜんである。芸術家げいぎゆつがとしての彼かのは己おのれに篤あつき作品さくひんを自然しぜんの気乗りき乗りで作あり上あげようとするに反さかして、職業家しぎぎやとしての彼は評判へいぱんのよきもの、売うれだかの多いおほいものを公おほけにしなくてはならぬからである。

すでに個人こじんの性格せいかく及び教育次第きよくうしだいで融通きの利きかなくなりそうなおイツケンおイツケンのいわゆる自由じゆうなる精神生活しんしんせいかつは、現今げんきんの社会組織しやかいしうしきの上うから見ても、これほど応用おうようの範圍はんいの狭せまいものになる。それを一般いぱんに行ゆき亘わたつて実行じっぎんのできる大主義だいしぎのごとくに説せつき去さる彼は、学者がくしやの通弊つうへいとして統一病いついびやうに罹かかつたのだと酷評こくへいを加くえてもよいが、たまたま文芸ぶんげいを好このんで文芸ぶんげいを職業し業ぎとしながら、同時に職業し業ぎとしての文芸ぶんげいを忌いんでいる余あまのごときものの注意ちゆういを呼び起おこして、その批評ひひやう心を刺戟しげきする力は充分じゆうぶんある。大患だいわんに罹かかつた余あまは、親おやの厄介やくがいになつた子供こどもの時とき以来いらい久ひさしぶりりで始めてこの精神生活しんしんせいかつの光ひかりに浴よくした。けれどもそれはわずか一ひと二ふたカ月げつの中なかであつた。病やまいが癒なほるに伴つれ、自己おのがしだいに実世間じつせいかんに押し出おされるに伴つれ、こう云いう議論ぎろんを公おほけにして得意たいていなオイツケンおイツケンを羨うらやまずにはいられなくなつて来た。

二十八

学校を出た当時小石川のある寺に下宿をしていた事がある。その和尚は内職に身の
 上判断をやるので、薄暗い玄関の次の間に、算木と筮竹を見るのが常であつた。固より
 看板をかけての公表な商買でなかつたせいも、占を頼に来るものは多くて日に四
 五人、少ない時はまるで筮竹を揉む音さえ聞えない夜もあつた。易断に重きを置かない
 余は、固よりこの道において和尚と無縁の姿であつたから、ただ折々襖越しに、和尚の、
 そりや当人の望み通りにした方が好うがすななどと云う縁談に関する助言を耳に挟さむ
 くらいなもので、面と向き合つては互に何も語らずに久しく過ぎた。
 ある時何かのついでに、話がつい人相とか方位とか云う和尚の縄張り内に摺り込んだの
 で、冗談半分私の未来はどうでしょうと聞いて見たら、和尚は眼を据えて余の顔をじつと
 眺めた後で、大して悪い事ありませんと答えた。大して悪い事もないと云うのは、大
 して好い事もないと云つたも同然で、すなわち御前の運命は平凡だと宣告したようなもの
 である。余は仕方がないから黙つていた。すると和尚が、あなたは親の死目には逢えませ

んねと云った。余はそうですかと答えた。すると今度はあなたは西へ西へと行く相がある
と云った。余はまたそうですかと答えた。最後に和尚は、早く願あこの下へ髻ひげを生やして、地
面を買って居宅うちを御建てなさいと勧めた。余は地面を買って居宅を建て得る身分なら何も
君の所に厄介になつちやいやいと答えたかつた。けれども願あこの下の髻と、地面居宅やしきとはど
んな関係があるか知りたかつたので、それだけちよつと聞き返して見た。すると和尚は真ま
面目じめな顔をして、あなたの顔を半分に割ると上の方が長くつて、下の方が短か過ぎる。し
たがつて落ちつかない。だから早く願あこ髻を生やして上下の釣つり合あいを取るようにすれば、顔
の居坐いすわりがよくなつて動かなくなりますと答えた。余は余の顔の雑ぞうざく作さくに向つて加えられ
たこの物理的もしくは美学的の批判が、優に余の未来の運命を支配するかのごとく容易に
説き去つた和尚を少しおかしく感じた。そうしてなるほどと答えた。

一年ならずして余は松山に行った。それからまた熊本に移つた。熊本からまた倫敦ロンドンに
向つた。和尚の云つた通り西へ西へと赴おもむいたのである。余の母は余の十三四の時に死んだ。
その時は同じ東京におりながら、つい臨終の席には侍はんべらなかつた。父の死んだ電報を東京
から受け取つたのは、熊本にいる頃の事であつた。これで見ると、親の死目に逢あえないと
云つた和尚の言葉もどうかこうか的中している。ただ願あこの髻ひげに至つてはその時から今日こんにち

に至るまで、寧日なく剃り続けに剃っているから、地面と居宅がはたして髯と共にわが手に入るかどうかいまだに判然せず^{はんぜん}にいた。

ところが修善寺で病氣をして寝つくや否や、頬がざらざらし始めた。それが五六日すると一本一本に撮めるようになった。またしばらくすると、頬から頤が隙間なく隠れるようになった。和尚の助言は十七八年ぶり^{じよごん}で始めて役に立ちそうな気色に髯は延びて来た。妻はいつそ御生やしなすつたら好いでしようと云った。余も半分その氣になって、しきりにその辺を撫で廻していた。ところが幾日となく洗いも櫛すりもしない髪が、膏と垢で余の頭を埋め尽くそうとする汚苦^{むさくる}しさに堪えられなくなって、ある日床屋を呼んで、不充分ながら寝たまま頭に手を入れて顔に髪剃を当てた。その時地面と居宅の持主たるべき資格をまた奇麗に失ってしまった。傍のものは若くなった若くなったと云ってしきりに囃し立てた。独り妻だけはおやすつかり剃っておしまいになったんですかと云って、少し残り惜しそうな顔をした。妻は夫の病氣が本復した上にも、なお地面と居宅が欲しかったのである。余といえども、髯を落さなければ地面と居宅がきつと手に入ると保証されるならば、あの顫はそのままに保存しておいたはずである。

その後髯は始終剃った。朝早く床の上に起き直つて、向うの三階の屋根と吾室の障

子この間にわずかばかり見える山やまの頂いただきを眺めるたびに、わが頬ほの潔いさぎよく剃り落してある滑なめらかさを撫なで廻まわしては嬉うれしがつた。地面と居宅は当分断念したか、または老後の楽しみにあとあとまで取とりおおくつもりだったと見える。

客夢回時一鳥鳴。夜来山雨晓来晴。

孤峯頂上孤松色。早映紅暎鬱々明。

二十九

修善寺しゆぜんじが村の名で兼かねて寺の名であると云う事は、行かぬ前から疾とくに承知していた。しかしその寺で鐘の代りに太鼓を叩たたこうとはかつて想おもい至らなかつた。それを始めて聞いたのはいつの頃であつたか全く忘れてしまった。ただ今でも余が鼓膜の上に、想像の太鼓がどん——どんと時々響く事がある。すると余は必ず去年の病気を憶おもい出す。

余は去年の病気と共に、新しい天てん井じょうと、新しい床とこの間まにかけた大島將軍の従軍の詩を憶い出す。そうしてその詩を朝から晩までに何遍となく読み返した當時を明あけさまに憶い出す。新しい天井と、新しい床の間と、新しい柱と、新らし過ぎて開閉あけたての

不自由な障子しょうじは、今でも眼の前にありありと浮べる事ができるが、朝から晩までに何遍となく読み返した大島將軍の詩は、読んでは忘れ、読んでは忘れして、今では白壁しろかべのように白い絹の上を、どこまでも同じ幅で走つて、尾頭おかしらともにぷつりと折れてしまふ黒い線を認めるだけである。句に至つては、始めの劍戟けんげきという二字よりほか憶い出せない。

余は余の鼓膜こまくの上に、想像の太鼓がどん——どんと響くたびに、すべてこれらのものを憶い出す。これらのものの中に、じつと仰向あおむいて、尻の痛さを紛まぎらしつつ、のつそつ夜明を待ち侘わびたその当時は回顧すると、修禪寺しゆぜんじの太鼓の音ねは、一種云うべからざる連想をもつて、いつでも余の耳の底に卒然と鳴り渡る。

その太鼓は最も無風流な最も殺風景な音を出して、前後を切り捨てた上、中間だけを、やけ自暴に夜陰に向つて擲たきつけるように、ぶつきら棒な鳴り方をした。そうして、一つどんと素気そっけなく鳴ると共にぱたりと留とどつた。余は耳を峙そはだてた。一度静まった夜の空氣は容易に動こうとはしなかつた。やや久しばらくして、今のは錯覚ではなからうかと思ひ直す頃に、また一つどんと鳴つた。そうして愛想あいそのない音は、水に落ちた石のように、急に夜の中に消えたぎり、しんとした表に何の活動も伝えなかつた。寝られない余は、待ち伏せをする兵士のごとく次の音ねの至るを思いつめて待つた。その次の音はやはり容易には来なかつた。

ようやくのこと第一第二と同じく極めて乾び切った響が——響とは云い悪い。黒い空気の中に、突然無遠慮な点をどつと打つて直筆を隠したような音が、余の耳朶を叩いて去る後で、余はつくづくと夜を長いものに観じた。

もつとも夜は長くなる頃であつた。暑さもしだいに過ぎて、雨の降る日はセルに羽織を重ねるか、思い切つて朝から袷を着るかしなければ、肌寒を防ぐ便とならなかつた時節である。山の端に落ち込む日は、常の短かい日よりもなおの事短かく昼を端折つて、灯は容易に点いた。そうして夜は中々明けなかつた。余はじりじりと昼に食い入る夜長を夜ごとに恐れた。眼が開くときつと夜であつた。これから何時間ぐらいこうしてしんと夜の中に生きながら埋もっている事かと思うと、我ながらわが病氣に堪えられなかつた。新らしい天井と、新らしい柱と、新らしい障子を見つめるに堪えなかつた。真白な絹に書いた大きな字の懸物には最も堪えなかつた。ああ早く夜が明けてくれればいいのにと思つた。

修禅寺の太鼓はこの時にどんと鳴るのである。そうしてことさらに余を待ち遠しがらせるごとく疎らな間隔を取つて、暗い夜をぼつりぼつりと縫い始める。それが五分と経ち七分と経つうちに、しだいに調子づいて、ついに夕立の雨滴よりも繁く逼つて来る変化は、余から云うともう日の出に間もないと云う報知であつた。太鼓を打ち切つてしばらくの後

に、看護婦がやつと起きて室の廊下の所だけ雨戸を開けてくれるのは何よりも嬉しかった。外はいつでも薄暗く見えた。

修善寺に行つて、寺の太鼓を余ほど精密に研究したものはあるまい。その結果として余は今でも時々どんと云う余音のないぶつ切つたような響を余の鼓膜の上に錯覚のごとく受ける。そうして一種云うべからざる心持を繰り返している。

夢。繞。星。※。夜。分。形。影。暗。灯。愁。

旗。亭。病。近。修。禪。寺。一。※。

三十

山を分けて谷一面の百合を飽くまで眺めようと心にきめた翌日から床の上に仆れた。想像はその時限りなく咲き続く白い花を基石のように点々と見た。それを小暗く包もうとする緑の奥には、重い香が沈んで、風に揺られる折々を待つほどに、葉は息苦しく重なり合つた。——この間宿の客が山から取つて来て瓶に挿した一輪の白さと大きさと香から推して、余は有るまじき広々とした画を頭の中に描いた。

聖書にある野の百合とは今云う唐菖蒲からしようぶの事だと、その唐菖蒲を床に活けておいた時、始めて芥舟君かいしゅうくんから教わつて、それではまるで野の百合の感じが違うようだがと話し合つた一月前ひとつきまえも思い出された。聖書と関係の薄い余にさえ、檜扇ひおうぎを熱帯的に派出はでに仕立てたような唐菖蒲は、深い沈んだ趣おもむきを表わすにはあまり強過ぎるとしか思われなかつた。唐菖蒲はどうでもよい。余が想像に描いた幽かな花は、一輪も見見る機会のないうちに立秋に入いつた。百合は露つゆと共に摧くだけた。

人は病むもののために裏の山に入いつて、ここかしこから手の届く幾いくくき茎の草花を折つて来た。裏の山は余の室へやから廊下伝いにすぐ上のぼる便のあるくらい近かつた。障子しょうじさえ明けておけば、寝ながら縁えんがわ側がわと欄間らんまの間を埋うずめる一部分を鼻の先に眺ながめる事もできた。その一部分は岩と草と、岩の裾すそを縫ううて迂回うかいして上のぼる小径こみちとから成り立っていた。余は余のために山のぼに上るものの姿が、縁の高さを辞して欄間の高さに達するまでに、一遍影を隠して、また反対の位地から現われて、ついに余の視線のほかに没してしまふのを大なる変化のごとくに眺めた。そうして同じ彼等の姿が再び欄間の上から曲折して下くだつて来るのを疎うとい眼で眺めた。彼らは必ず粗あらい縞しまの貸浴衣かしゆかたを着て、日の照る時は手拭てぬぐいで頬ほ冠かむりをしていた。岨道そぼみちを行くべきものとも思われぬその姿が、花を抱かかえて岩の傍そばにぬつと現われ

ると、一種芝居にでも有りそうな感じを病人に与えるくらい釣合がおかしかった。

彼等の採つて来てくれるものは色彩の極めて乏しい野生の秋草であった。

ある日しんとした真昼に、長い薄が畳に伏さるように活けてあつたら、いつどこから来たとも知れない蟋蟀がたつた一つ、おとなしく中ほどに宿つていた。その時薄は虫の重みで撓いそうに見えた。そうして袋戸に張つた新らしい銀の上に映る幾分かの緑が、暈したように淡くかつ不分明に、眸を誘うので、なおさら運動の感覚を刺戟した。

薄は大概すぐ縮れた。比較的長く持つ女郎花さえ眺めるにはあまり色素が足りなかつた。ようやく秋草の淋しさを物憂く思い出した時、始めて蜀紅葵とか云う燃えるような赤い花弁を見た。留守居の婆さんに銭をやつて、もつと折らせると云つたら、銭は要りません、花は預かり物だから上げられませんが断つたそうである。余はその話を聞いて、どんな所に花が咲いていて、どんな婆さんがどんな顔をして花の番をしているか、見たくてたまらなかつた。蜀紅葵の花弁は燃えながら、翌日散つてしまった。

桂川の岸伝いに行くといくらでも咲いていると云うコスモスも時々病室を照らした。コスモスはすべての中で最も単簡でかつ長く持った。余はその薄くて規則正しい花片と、空に浮んだように超然と取り合はぬ咲き具合とを見て、コスモスは干菓子に似ていると評

した。なぜですかと聞いたものがあつた。範頼のりよりの墓守はかもりの作ったと云う菊を分けて貰つて来たのはそれからよほど後の事のちである。墓守は鉢に植えた菊を貸して上げようかと云つたそうである。この墓守の顔も見たかつた。しまいには畠山はたけやまの城址しろあとからあげびと云うものを取つて来て瓶へいに挿はさんだ。それは色の褪さめた茄子なすの色をしていた。そうしてその一つを鳥つが啄ついて空洞うつつろにしていた。——瓶に挿さす草と花がしだいに変わるうちに気節はようやく深い秋に入いつた。

日似三春永。心随野水空。
 牀頭花一片。閑落小眠中。

三十一

若い時兄を二人失つた。二人とも長い間床とこについていたから、死んだ時はいずれも苦しみ抜いた病やまいの影を肉の上に刻きざんでいた。けれどもその長い間に延びた髪ひげと髯ひげは、死んだ後あとまでも漆うるしのように黒くかつ濃かつた。髪はそれほどでもないが、剃そる事のできないで不本意ふほんいらしく爺々汚じじむさそうに生えた髯ひげに至つては、見るから憐あわれであつた。余は一人の兄の太く

遅しい髯の色をいまだに記憶している。死ぬ頃の彼の顔がいかにも気の毒なくらい瘡せ衰えて小さく見えるのに引き易えて、髯だけは健康な壯者を凌ぐ勢で延びて来た一種の対照を、気味悪くまた情なく感じたためでもあろう。

大患に罹つて生か死かと騒がれる余に、幾日かの怪しき時間は、生とも死とも片づかぬ空裏に過ぎた。存亡の領域がやや明かになった頃、まず吾存在を確かめたいと云う願から、とりあえず鏡を取つてわが顔を照らして見た。すると何年か前に世を去つた兄の面影が、卒然として冷かな鏡の裏を掠めて去つた。骨ばかり意地悪く高く残つた頬、人間らしい暖味を失つた蒼く黄色い皮、落ち込んで動く余裕のない眼、それから無遠慮に延びた髪と髯、——どう見ても兄の記念であつた。

ただ兄の髪と髯が死ぬまで漆のように黒かつたのかかわらず、余のそれらにはいつの間にか銀の筋が疎らに交つていた。考えて見ると兄は白髪の生える前に死んだのである。死ぬとすればその方が屑よいかも知れない。白髪に鬢や頬をほつほつ冒されながら、まだ生き延びる工夫に余念のない余は、今を盛りの年頃に容赦なく世を捨てて逝く壯者に比べると、何だかきまりが悪いほど未練らしかつた。鏡に映るわが表情のうちには、無論はないと云う心持もあつたが、死に損なつたと云う恥も少しは交つていた。また「ヴァージ

ニバス・ピュエリスク」の中に、人はいくら年を取っても、少年の時と同じような性情を失わないものだと思つてあつたのを、なるほどと首肯うなずいて読んだ當時を憶おもい出して、ただその当時に立ち戻りたいような氣もした。

「ヴァージニバス・ピュエリスク」の著者は、長い病苦に責められながらも、よくその快活の性情を終しゆうえん焉んまで持ち続けたから、嘘うそは云わない男である。けれども惜しい事に髪の毛の黒いうちに死んでしまった。もし彼が生きて六十七の高齡に達したら、あるいはこうは云い切れなかつたらうと思えば、思われぬ事もない。自分が二十の時、三十の人を見れば大變に懸隔があるように思ひながら、いつか三十が来ると、二十の昔と同じ氣分な事が分つたり、わが三十の時、四十の人に接すると、非常な差違を認めながら、四十に達して三十の過去をふり返れば、依然として同じ性情に活きつつある自己を悟つたりするので、スチーヴンソンの言葉もつともと受けて、今日きょうまで世を經へたようなものの、外部きんぎから萌もして来る老ろう顏がんの徵候しごうを、幾莖いくけいかの白髪はくはつに認めて、健康の常時じょうじとは心意おもむきごとの趣おもむきを異にする病び裡よつりの鏡かがみに臨まんだ刹那せつなの感情かんじには、若い影かげはさらに射ささなかつたからである。

白髪はくはつに強しいられて、思おもひ切りよく老おいの敷居しきいを跨またいでしまおうか、白髪はくはつを隠かくして、なお若い街巷ちまたに徘徊はいかいしようか、——そこまでは鏡かがみを見た瞬間しゆんには考かんがへなかつた。また考かんがえる必かならず

要のないまでに、病める余は若い人々を遠くに見た。病気に罹る前、ある友人と会食したら、その友人が短かく刈つた余の揉上を眺めて、そこから白髪に冒されるのを苦にしてだんだん上の方へ剃り上げるのではないかと聞いた。その時の余にはこう聞かれるだけの色気は充分あつた。けれども病に罹つた余は、白髪を看板にして事をしたいくらいまでに諦めよく落ちついていた。

病の癒えた今日こんにちの余は、病中の余を引き延ばした心に活きているのだろうか、または友人と食卓についた病気前の若さに立ち戻っているだろうか。はたしてスチーヴンソンの云つた通りを歩く気だろうか、または中年に死んだ彼の言葉を否定してようやく老境に進むつもりだろうか。——白髪と人生の間に迷うものは若い人たちから見たらおかしいに違ない。けれども彼等若い人達にもやがて墓と浮世の間に立って去就を決しかねる時期が来るだろう。

桃。花。馬。上。少。年。時。
笑。抛。銀。鞍。払。柳。枝。
緑。水。至。今。迢。遞。去。
月。明。來。照。鬢。如。糸。

初めはただ漠然と空を見て寝ていた。それからしばらくしていつ帰れるのだろうと思出した。ある時はすぐにも帰りたいような心持がした。けれども床の上に起き直る気力すらないものが、どうして汽車に揺られて半日の遠きを行くに堪え得ようかと考えると、帰りたいと念ずる自分がかかなり馬鹿気て見えた。したがって傍のものに自分はいつ帰れるかと問い糺した事もなかつた。同時に秋は幾度の昼夜を巻いて、わが心の前を過ぎた。空はしだいに高くかつ蒼くわが上を掩い始めた。

もう動かしても大事なかろうと云う頃になって、東京から別に二人の医者を迎えてその意見を確めたら、今二週間の後に云う挨拶であつた。挨拶があつた翌日から余は自分の寝ている地と、寝ている室を見捨るのが急に惜しくなつた。約束の二週間がなるべくゆつくり廻転するようにと冀つた。かつて英国にいた頃、精一杯英国を悪んだ事がある。それはハイネが英国を悪んだごとく因業に英国を悪んだのである。けれども立つ間際になつて、知らぬ人間の渦を巻いて流れている倫敦の海を見渡したら、彼らを包む鳶色とびいろの空気の奥に、余の呼吸に適する一種の瓦斯が含まれているような気がし出した。余は空を仰いで町の真中に佇ずんだ。二週間の後この地を去るべき今の余も、病む軀を横えて、

床の上に独り佇ずまざるを得なかつた。余は特に余のために造つて貰つた高さ一尺五寸ほどの偉大な藁蒲団に佇ずんだ。静かな庭の寂寞を破る鯉の水を切る音に佇ずんだ。朝露に濡れた屋根瓦の上を遠近と尾を揺かし歩く鶺鴒に佇ずんだ。枕元の花瓶にも佇ずんだ。廊下のすぐ下をちよろちよろと流れる水の音にも佇ずんだ。かくわが身を繞る多くのものに、徊しつ、予定の通り二週間の過ぎ去るのを待った。

その二週間は待ち遠いのがゆさもなく、またあつけない不足もなく普通の二週間のごとくに来て、尋常の二週間のごとくに去つた。そうして雨の濛々と降る暁を最後の記念として与えた。暗い空を透かして、余は雨かと聞いたら、人は雨だと答えた。

人は余を運搬する目的をもつて、一種妙なものを拵らえて、それを座敷の中に昇き入れた。長さは六尺もあつたらう、幅はわずか二尺に足らないくらい狭かつた。その一部は畳を離れて一尺ほどの高さまで上に反り返るよう工夫してあつた。そうして全部を白い布で捲いた。余は抱かれて、この高く反つた前方に背を託して、平たい方に足を長く横たえた時、これは葬式だなどと思つた。生きたものに葬式と云う言葉は穩当でないが、この白い布で包んだ寝台とも寝棺とも片のつかないものの上に横になつた人は、生きながら葬われるとしか余には受け取れなかつた。余は口の中で、第二の葬式と云う言葉をしきりに繰り返

返した。人の一度は必ずやつて貰う葬式を、余だけはどうしても二返^{へん}執行しなければすまないと思つたからである。

昇^かかれて室^{へや}を出るときは平^{たいら}であつたが、階^{はし}子^ご段^{だん}を降りる際には、台が傾いて、急に輿^{こし}から落ちそうになつた。玄関に来ると同宿の浴^{よく}客^{かく}が大勢並んで、左右から白い輿^{こし}を目^め送^うしていた。いずれも葬式の時のように静かに控えていた。余の寝台はその間を通り抜けて、雨の降る庇^{ひさし}の外に担^{かつ}ぎ出された。外にも見物人はたくさんいた。やがて輿^{こし}を豎^{たて}に馬車の中に渡して、前後相對する席と席とで支えた。あらかじめ寸法を取つて拵^{こし}らえたので、輿^{こし}はきつしりと旨^{うま}く馬車の中に納つた。馬は降る中を動き出した。余は寝ながら幌^{ほろ}を打つ雨の音を聞いた。そうして、御^ぎ者^{しや}台^{だい}と幌^{ほろ}の間に見える窮屈な空間から、大きな岩や、松や、水の断片をありがたく拝した。竹^{たけ}藪^{やぶ}の色、柿^{かき}紅葉^{もみじ}、芋^{いも}の葉、檀^{むくげ}垣^{がき}、熟した稲の香^か、すべてを見るたびに、なるほど今はこんなもの有るべき季節であると、生れ返つたように憶^{おも}い出しては嬉^{うれ}しがつた。さらに進んでわが帰るべき所には、いかなる新らしい天地が、寝^{ひと}ぼけた古い記憶を蘇生せしむるために展開すべく待ち構えているだろうかと想像して独^{ひと}り楽しんだ。同時に昨^{きのう}日まで 徊^{ていかい}した藁^{わら}蒲^ぶ団^{だん}も鵲^{せきれい} 鶺^{せきれい}鴒^いも秋草も鯉^{こい}も小河もこごとく消えてしまつた。

万。事。休。時。一。息。回。
 風。過。古。澗。秋。声。起。
 漫。道。山。中。三。月。滯。
 歸。期。勿。後。黃。花。節。
 余。生。豈。忍。比。殘。灰。
 日。落。幽。篁。暝。色。來。
 ※
 恐。有。羈。魂。夢。旧。苔。

三十三

正月を病院でした経験は 生しょうがい涯がいにたつた一いっぺん遍べんしかない。

松飾りの影が眼先に散らつくほど暮が押しつまつた頃、余は始めてこの珍らしい経験を
 目前に控えた自分を異様に考え出した。同時にその考かんがえが単に頭だけに働らいて、毫ごうも心臓
 の鼓動に響を伝えなかつたのを不思議に思った。

余は白い寢床ベッドの上に寝ては、自分と病院と来るべき春とをかくのごとくいつしよに結び
 つける運命の酔すいきよう興きようさ加減を懇ねんごろに商しょうりよう量りようした。けれども起き直つて机に向つたり、
 膳ぜんに着いたりする折は、もうここが我わがいえ家いえだと云う気分まかに心を任まかして少しも怪しまなかつ
 た。それで歳は暮れても春は逼せまつても別に感慨と云うほどのものは浮ばなかつた。余はそ

れほど長く病院にいて、それほど親しく患者の生活に根をおろしたからである。

いよいよ大晦日おおみそかが来た時、余は小さい松を二本買って、それを自分の病室の入口に立てようかと思つた。しかし松を支えるために釘くぎを打ち込んで美しくいい柱きすに創きずをつけるのも悪いと思つてやめにした。看護婦が表へ出て梅でも買って参りましょうと云うから買って貰う事にした。

この看護婦は修善寺しゆぜんじ以来余が病院を出るまで半年はんねんの間始しじゆう終余の傍そばに付き切りに附いていた女である。余はことさらに彼の本名を呼んで町井石子嬢まちいしこじよう町井石子嬢と云つていた。時々は間違えて苗字みょうじと名前を顛倒てんとうして、石井町子嬢とも呼んだ。すると看護婦は首を傾かしげながらそう改めた方が好いようでございますねと云つた。しまいには遠慮がなくなつて、とうとう鼬いたちと云う渾名あだなをつけてやつた。ある時何かのついでに、時に御前の顔は何かに似ているよと云つたら、どうせ碌ろくなものに似ているのじやございますまいと答えたので、およそ人間として何かに似ている以上は、まず動物にきまつている。ほかに似ようたつて容易に似られる訳のものじやないと言つて聞かせると、そりや植物に似ちや大變ですと絶ぜつききよう叫きようして以来、とうとう鼬いたちときまつてしまったのである。

鼬の町井さんはやがて紅白の梅を二枝提さげて帰つて来た。白い方を蔵ぞうたく沢の竹の画えの前

に挿して、紅い方は太い竹筒の中に投げ込んだなり、袋戸の上に置いた。この間人から貰った支那水仙もくると曲つて延びた葉の間から、白い香をしきりに放った。町井さんは、もうだいぶん病気がよくおなりだから、明日はきつと御雑煮が祝えるに違ないと云つて余を慰めた。

除夜の夢は例年の通り枕の上に落ちた。こう云う大患に罹つたあげく、病院の人となつて幾つの月を重ねた末、雑煮までここで祝うのかと考えると、頭の中にはアイロニーと云う羅馬字が明らかに綴られて見える。それにもかかわらず、感に堪えぬ趣は少しも胸を刺さずに、四十四年の春は自ずから南向の縁から明け放れた。そうして町井さんの予言の通り形ばかりとは云いながら、小さい一切の餅が元日らしく病人の眸に映じた。余はこの一椀の雑煮に自家頭上を照らすある意義を認めながら、しかも何等の詩味をも感ぜずに、小さな餅の片を平凡にかつ一口に、ぐいと食つてしまった。

二月の末になつて、病室前の梅がちらほら咲き出す頃、余は医師の許を得て、再び広い世界の人となつた。ふり返つて見ると、入院中に、余と運命の一角を同じくしながら、ついに広い世界を見る機会が来ないで亡くなつた人は少なくない。ある北国の患者は入院以後病勢がしだいに募るので、附添の息子が心配して、大晦日の夜になつて、無理

に郷里に連れて帰つたら、汽車がまだ先へ着かないうちに途中で死んでしまった。一間置ひとまいて隣りの人は自分で死期を自覚して、諦あきららめてしまえば死ぬと云う事は何でもないものだ。云つて、気の毒なほどおとなしい往生を遂げた。向うの外れはずにいた潰瘍患者かいようかんじやの高たかい咳嗽せきが日ごとひに薄らいで行くので、大方落ちついたのだろうと思つて町井さんに尋ねて見ると、衰弱の結果いつの間にか死んでいた。そうかと思つと、癌がんで見込のない病人の癖くせに、から景気をつけて、回診の時に医師の顔を見るや否や、すぐ起き直つて尻しりを捲まくるといふのがあつた。附添の女房を蹴けたり打ぶつたりするので、女房が洗面所へ来て泣いているのを、看護婦が見兼ねみかねて慰めていましたと町井さんが話した事も覚えてゐる。ある食道狭しよくどうきよ窄うさくの患者は病院には這入はいつてゐるようなものの迷いに迷い抜いて、灸きゆう点師うてんしを連れて来て灸すを据すえたり、海草かいそうを採とつて来て煎せんじて飲んだりして、ひたすら不治の癌がん症しょうを癒なおそうとしていた。……

余はこれらの人と、一つ屋根の下に寝て、一つ賄まかないの給仕を受けて、同じく一つ春を迎えたのである。退院後一カ月余よの今こんにち日ひになつて、過去をひとつかみ一ひと攫つかみにして、眼の前に並べて見ると、アイロニーの一語はますます鮮やかに頭の中に拈ねん出しゅつされる。そうしていつの間にかこのアイロニーに一種の実感が伴つて、兩ふたつものが互たがひに纏綿てんめんして来た。鼪たぬの町

井さんも、梅の花も、支那水仙も、ぞうに雑煮も、——あらゆる尋常の景趣はことごとく消えたのに、ただ当時の自分と今の自分との対照だけがはつきりと残るためだろうか。

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集7」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年4月26日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：柴田卓治

校正：伊藤時也

1999年6月26日公開

2011年1月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

思い出す事など

夏目漱石

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>